忠臣伊呂波實記

忠臣伊呂波實記

第一

序詞歳寒して然後。松伯の後に凋ことを知る。されば君子治世に在ては。或は小人と異ことなし。惟利害に臨事變に遇て。忠臣節義著るゝ。例を爰に日の本の治り靡く。君が代や地比は康永元年三月二日。足利將軍源の尊氏公。握る四海の御片腕。關八州の管領。御舍弟足利左兵衞督直義公。美麗を盡す鎌倉御所。大廣間に出給へば。執事高武藏守師直。威勢に誇る奸佞邪智。伯州の城主鹽冶判官高定。仁義を守る優美の相。其外在鎌倉の大小名。フシ威儀を。正して相詰れば。地師直が郎等大須賀團八宗門。鹽冶の家來久松半六時重。遙末座に控居る。直義公仰出さるるは。詞例年の通り年始の嘉儀として。近々勅使下向に付。饗應の一件は鹽冶判官に申付る。地其旨兼て心得よと。仰にハツト頭を下げ。詞ハア身不肖の判官勅使御馳走の大役。仰を蒙り奉る事冥加に叶ふ仕合せ去ながら。元來不才の判官なれば。公家堂上の饗應其故實を知らざれば。近比以て覺束なく候と。地卑下の詞の圖に乘て。横から差出る大須賀團八。詞イヤコレ判官樣。假初ならぬ雲の上人。禮儀作法を御存なく。不束な御取扱ひ有時は。將軍の御恥辱に成事。左樣の故實は主人師直能く心得罷在。得と御稽古成されよと。地主の威光を鼻懸。人を見下す高慢を。堪へ兼て久松半六進出し。詞ヤア團八。人も無げなる故實呼り。主人がおとなしく御謙退なされるれば。御存じないと思ふが淺はか。文武に達する主人判官。夫式の事何の稽古。汝如きが知事ならずひつこんでお居やれと。地遣込れば堪ぬ團八。詞ヤアお爲を存じて言聞すを。否なれば否て濟。武士に向つて慮外の雜言。今一言云て見よ手は見せぬと、地切刄廻せばハヽヽヽ。詞虚威の切物三昧。汝如きの片形武士に。輙く切らるゝ半六ならず。地サア拔け勝負雙方

が。角目立て　フシ迫合を。　地師直鹽冶聲を掛。　詞ヤ尾籠なり鎖れやつと。地主の詞に兩人は。　フシ無念を堪控へ居る。　地判官師直に打向ひ。　詞家來めが麁忽無禮御前は固より。師直公の思召恐入る。いかにも團八申しの通。御馳走の役目は。私ならぬ公の大禮。萬に一つも間違ひ有ては相濟ず。　地師直公には御老功。か樣の事に馴給へば。萬端宜しく御差圖下さるべしと。慇懃に述給へば。　詞コレ〳〵痛入た御挨拶。今列國の諸侯の內。文武の達人と呼はれ給ふ判官殿。師直なんどが差圖とはおこがまし去ながら。物には得失得手不得手も有內の事。　地身に應じたる事あらば何に寄ず御相談。　詞夫に付明々後日。拙者弟師泰が別莊の。咲掛る初櫻御覽に入奉らんと。直義公へ申上しに。御入有べきと有難き上意。何と貴公も。御苦勞ながら御出有て。御取持下されまいか。コレハ〳〵。君御入來在すに付。御取持仰付られ下されんとは。冥加に餘る仕合せ。頓より參って灑掃の御手傳。夫は近比忝い。　地然らば彌明々後日と。　フシ示し合する折柄に。　地鶴が岡の神主大伴豐前。何か怪敷一品を。携へて御前に出。　詞是こそは鶴が岡八幡宮の本社の軒に掛置たる蜂房。今朝社壇へ上りし所。此蜂房の上へ。外より大さ蟬の如き山蜂一つ飛來る。房の中よりは小蜂數多飛出て。暫時が間戰ひしが。多勢に一つの彼山蜂。終に殺され地に落たり。暫く有て空中より。　地鞠の如き一塊り然も凄じく鳴渡る。　詞あはやと見る內彼塊碎散ば。數千の山蜂飛散て此蜂房を取圍聲をなす事雷の如し。　地小蜂は殘らず房を出て。互に四方に群散して。列を分ち陣を列ね。上を下へと嚙合事二時計に及びしが。　詞終に山蜂勝利を得小蜂を殘らず平げて。　詞凱歌の如く鳴渡り空中に飛去たり。　詞奇怪の事に候故言上仕り候と。　地申上れば君を始。一座の人々一同に　フシ奇異の。思ひをなしにけり。　地師直は冷笑ひ。　詞都て巫神子山伏祈禱料を制占んと。然してもなき事にても仰山そふに言立。物の兆候前表なんど。觸行は間〻有習。何のたわいもない事と。　地言剖せば鹽冶判官。　詞ハイヤ夫は憚ながら一旣の御詞。王元之が蜂記に。蜂王迚蜂の中に王有。衆の蜂毒有れ共彼王には毒もなく。多くの蜂房を作る時。　地別に一つの臺をなして王を居らしめ。王の子は悉く王と成て。年毎に其族

を分つ。詞王死すれば衆の蜂。一つも殘らず潰死す。若し王を殺す者有ば必其仇を報ふ。節義を守ると兼てより。承はりして目の當り。見しは聞しは初なり。ハテ扨不思議千萬と。地互の評議身の上と。知らぬが佛神主も。フシお暇申し立出る。地直義公は奥御殿。徐々と入御成給へば。各ハツト退出の袖を連る鎌倉山。崩は物に顯れて。敵を討し虫の名も。フシいろはのはの字。ちりぬるのちの字の訓も清濁。はぢを恥共思はねば。切らるゝ事は夢にだに知らぬ師直たくみある。鹽冶の家の忠臣義士。末世の手本假名文字の。動かぬ御代こそ　大三重〈久しけれ

第二

歌今も昔も。其處も彼處も戀の里　サヨエエ。スリヨ。テイキンリヨ〳〵　スイヤ〳〵。昔男も奈良の都も色勝り　サヨエ。エスリヨ。テイキンリヨ〳〵。スイヤ〳〵。梅は咲ねど鶯の。折々通ふ心意氣。そふじやといナ。花の盛はちら。ちら〳〵散來る我思ひ。眞實そふじやいナ。それじや夫かと夕間暮。詞ホヽヽヽほんにマアつがもない。今日は師泰樣の此お屋敷へ直義樣お入遊ばす。今樣を御覽に入よと殿樣の御意で奥女中は固より。御家中の娘子達を呼出して此間より俄の稽古。女鳴神にお吉さま。劔烏帽子はおみよ樣。此玉章は今樣亂拍子。若菜殿と青柳殿の白雲黑雲の役は下地が有て苦勞はない。わたしは今度が初て故モ大抵案じる事ではない。イヱ〳〵奥樣の御慰み。此青柳を始お狂言の度々に。稽古してさへ毎でもろくな役は付ぬに。玉章樣は初舞臺の大役遣らず遁さず一時が萬事。驚入た御器用と。地譽そやされて　フシ顏赤らめ。詞イヽエイナ習ふより馴るとやら。皆樣は不斷の事御存の通私が兄速水一學殿は物堅い生質。琴を彈ても組計で端歌や流行歌は彈な。家老を勤る一學が妹が。半端なと言れては一家中の示が聞ぬ。芝居も度々は見るなと夫は〳〵堅い言付。夫故振もろくに覺へずほんのあて仕舞にして置計。まだ稽古も固らねど御客のお入に間もあるまい。是切にしてお出を

待ふじやござんせぬか。地ほんに夫が宜ろぞへ。今日のお客直義様は御器量よし。此方等もわつさり目の正月とフシ跡は打付色咄し。地媚き渡る折柄に。立出る高師直。跡に從ふ越後守師泰。呢近藥師寺次郎左衞門引連て立出れば。玉章始め女中達。ハツトフシ敬ひ手を突ば。地師直心地好げに打點頭。詞ホ、どれ〳〵も精が出るよ。兼て老女共を以て言付た通り今日直義公此別荘へ御入。男の給仕は堅くろしい故女計の御饗應。コリヤ〳〵玉章其方は一學が妹程有て欲の道香茶の湯。萬事心掛が能と聞。今日の御馳走の司役。何に寄ず直義公の御意遊す事は。隨分と背ぬ様にナソレ御機嫌取れ。若もお目に留れば仕合せといふ物。ナント師泰そふでないか。ハア御意の通り。女は氏無ふして玉の輿隨分と氣を付よと。地顔に似合ぬ溫々は爪を隱して野等猫の牡丹にフシ遊ぶも斯やらん。地斯る折しも表より息を量に立歸る遠見の役人程なく二番手三番手。最早彼處へと注進に。師直兄弟藥師寺諸共。フシ表の方に出向へば。地足利左兵衞督直義公。お供廻りは表に殘し。歩路も結句お慰。跡に隨ふ鹽冶判官高定。フシ徐々と入給ひ地夫と見るより直義公。詞ホ、定て何か心遣ひ過分〳〵との給へば。ハテ冥加に餘る仕合せと。地師直兄弟地に鼻付れば。判官も差寄て。詞今日はお成の所天氣宜く恐悦至極。萬事嘸御取込。コレハ〳〵鹽冶殿能ぞ御入忝しと。地互の挨拶事終り案内にフシ連て入給へば。地御馳走掛りの女中達。上を下へと立騒ぎ。奥は御酒宴今様の。跳の調太跳の音。三絃胡弓取々に。暫く時をぞ移しける。詞專ど興有饗應に。御酒の機嫌も直義公。フシ一間の方に出給へば。地跡に隨ふ數多の女中。詞コリヤ〳〵女共直義が醉醒し庭の景色を見るが樂しみ。左様大勢が付て來ては。氣が詰つて興が醒る。用が有ば呼ふ次へ。地〳〵と上意にハツト女中達フシ皆斑々と立て行。地園の間より玉章が。濃茶の手元長成に。君を見る眼の何處やらに。色と情を熊川の茶碗を御手に直義公。快くふ召上られ。詞ム、器量が美ければ服加減迄格別〳〵。師直兄弟が馳走振。大勢の女共の内勝れたる艶色。外の女は氣に入ぬ故殘らず次へ追遣て其方の來るを待て居た。所へ君が地濃茶とは結ぶの神の挽茶の加減と手を取て寄添ひ給へば嬉しさも又。恥かしく無端震ふてフシ跡巡。詞有

難いお詞去ながら私等風情が勿體ない。地赦させ給へと袖覆ふ。腦の渦に魂を吸込るゝ心地にて。直義公は心も空昔用明天皇は。地草刈山路の略し事。戀に上下の隔はないと。腔と引寄締給へば。此方も固より渡りに舟。惚たほの字の帆を卸す。戀の湊や圍の内手を引合て入給ふ夢や人目を忍ぶらん。地表の方より聲高く。詞鹽冶判官様よりお使者なりと フシ呼次ば。地師直が長臣速見一學春親出向へば。入來る使者は鹽冶の家の子片岡傳吾高久。進物の白臺を。所狹まで並べさせ。互にそれ〳〵上下の。折目正しく手をつかへ。詞今日は直義公御入遊さるゝに付。主人判官お取持仰付られ下さる段。其身は勿論一家中此上もなき歡び。別して近々勅使御下向。御馳走の役目承りの主人判官。此上共師直公萬事宜しく御差圖希ひ奉つる。是は近比左少ながら。今日主人此所へ參上の土產の印。目錄の通り。地宜しく御披露下さるべしと相述れば一學もしとやかに。詞是は〳〵御念入たるお使者と申し。御懇志の御賜。地此旨主人へ申聞んと一間へ フシこそは入にける。地跡には使者を饗應の。御菓子よお茶よ芽盆。手都合。フシ殘る方もなし。地程もあらせず高の師直。速水藥師寺引連て立出れば傳吾はハツト飛逡巡 フシ恐入たる計なり。地師直緩々と打詠め。詞鹽冶殿の御使者大義〳〵。一間へと申さんがお客にて甚取込。扨又御念の入た御音物。近比以て痛入。猶委しくはお直にお禮申さん。ナニ一學爰は手狹。表の物見て饗應〳〵。ハア御懇命を蒙り冥加至極。此上共主人が身の上。萬事御前の御差圖。何が扨々。當時若手の英雄。師直が方からお賴申す。ハア重々有難き御意の趣。何分にも宜しく賴奉る。地イザお暇と立上れば。詞ソレ一學敷臺迄送れ〳〵。ハア夫には決して。イヤサお出と。地謙退辭讓。使者を見送る一學は。フシ玄關指て行跡に。地機嫌極上師直が。お髭の塵取次郎左衞門。詞扨々。若けれ共諸事に氣の付鹽冶殿。殊更に思ひ切た此進物。黃金百枚。縮緬五十卷。主が主なりや使者に來た。傳吾迄が人品骨柄。イヤモ格別違ふた仕こなしと。地譽嗤すれば師直は。大口明て呵々と笑ひ。詞蟹は甲に似せて穴を掘と。黃金卷物を嬉しがる根性の。師直と思ふか。弟師泰と心を合せ。尊氏公を追下し。天下を一呑と思へども。東國には石堂が一族。中國に

は仁木左京介。分て心掛りは鹽冶判官大身なる一門多く。文武を兼し强者。滅多に旗は揚られずと。種々と工夫を廻らし。直義公を此別荘に招入。酒色を以て心を蕩し。徐々と馬鹿者に仕立。謀反を勸め尊氏公と兄弟軍を始させ。其虚に乘て討て出ん思ひ立。幸ひ鹽冶を取持にと。今日此所へ招きしも。味方に付か付ざるかと心を引見る所。念の入つた此進物は我に心を寄ると見へたり。地夫故の我悦びと。聞て我を折る次郎左衞門。詞ハア驚入たる御手便。直義も透許と。玉章が陷阱に落入たれば。是から立ふとせふと儘。地旨い〳〵とフシ點頭所へ。立出る逸水一學。白木の折を目通りに直し置。詞仰付られし御饗應の御菓子。御内覽と差出せば。地次郎左衞門躙寄。蓋を開けば生々しき女の切首。さしも不敵の師直も。悔りしながら打詠め。詞ヤアコリア玉章が首。誰が切た誰が討たと。地藥師寺諸共驚けば。一學は色も變ぜず。詞今日の御賓直義公へ不義働き。天下騷亂の根崩と成女故。妹迪用捨ならず。此一學が手に掛て首討たり。コレ殿。何が不足で謀反を企て。君に敵對のみならず。酒色を以て直義公を馬鹿者に仕立。御兄弟の御中を裂んとは。取所もなき惡逆無道。天魔が見入候か。欲と惡とに御目も眩鹽冶を哆し。御味方に付んとの御計ひ。事可笑や。仁義を守る判官殿。甲が舍利に成とても。惡事に合體有べきや。詰る所は責一人。御身の難義遠かるまじ。是なる藥師寺を始。お傍に諂ふ愚蒙の佞人。御前能儘惡事の腰押。御家を亡す惡魔外道。假令いか程に思召共。此一學が眼の黑い内は。いつかな〳〵思ひも寄ずと。地齒に絹着せぬ諫の詞。懸河の辨舌逸水が忠義。フシ凉しくも又潔し。地師直は不興げに。物をも言ず立上り。行んとするをどつこへ何處へ。詞惡心を飜し。思止まるといふ御一言。承らぬ其内は。主人でも此座は立せぬ。動せぬと。過言申も御前が大切。お家長久繁昌を。思ふての御諫言。憎しと思召ならば此一學。命は惜まぬ切なりと突なりと。御存分に遊ばされ。地惡事を思止まつて給べと。忠義の涙斑々々。伏向所を師直が。無法の刄拔討に。肩先ずつぱと切込しが。詞エヽ眞二つにと思ひしに。仕損ぜし殘念と。地又切付るを引外し。刀の鍔元睨かと取。詞チエヽ見下果たる御所存。幼少から御氣質を存じて諫る一學命惜ん

で申されふか。死ねなら死ねと御意有ば。忠臣の腸を切裂て。侯人共の生面へ。打付てお目に掛んに。欺討とは御比興千萬。三度諫て退くとは。唐人の迂遠了簡。善にもせよ惡にもせよ。お家譜代の此一學。御恩に育た體なれば。まさかの時は死ぬる分と。我身の覺悟は武士の本心。地不便なは妹玉章。詞ひよんな道具に遣れて。助置れぬ時宜故に。お主の惡事を諫る種。命を吳よと賴しに。洗石一學が妹程有て。惡びれもせず首差延て。討れたる末期の際の一言。父母も無き此身なれば。外に心は殘らねども直義樣の。お顏が只一目。見て死たいと言た時の。可愛さ不便さ男女の情を辨へ知らぬ一學ではなけれ共。ナお主の爲には替られずと。只つた一人の妹を首討た其時の心。コリヤどの樣に有ふと思ふぞやい。其方の首が御主人は。忠義の種と云聞した。詞も今では反古に成り。御用ひなければ兄弟共。犬死するも厭はねど。段々の惡事が募。主人のお家滅亡せん。夫が悲しい。殘念な。コレ。地殿。思し止まり給はれと。又取付を振放し閃りと見へし刀の下。首はどつさり此世の暇。フシ殘念限りなかりけり。地師直は佛頂面。詞ヱヱひよんな奴めが邪魔をして。お客の御馳走怠つたり。ソレ次郎左衞門見苦しき。其死骸。取捨させよ。地畏つて立折から。直義公御立と。知する間もなく徐々と。鹽冶師泰召連て立出給へば。地師直は轉倒閉口。直義公は何氣なく。御饗應の御挨拶。判官もしとやかに。詞御念の入たる御饗應。君にも殊ない御滿悅。拙者に於ても忝く。御禮中々言語には述難し。ハア今暫くと存ぜし所。早々の御歸館殘念至極と。地師泰倶々輔翼を。さあら體に立出給へば。藥師寺が先拂ひ。兄弟お跡に付添ふて。フシ御門に送り奉る。フシ奥より出づる青柳若菜。詞ほんにマアどふした事か思ひの外早いお立。そしてマア先刻にから合點の行ぬ館の樣子と。地見遣目先の死骸に悔り。詞ヲヽこはコリヤ一學樣。玉章樣のお首。どふして殺されしやんした。サレハイノ。何ぞ御意に背いてお手討に合なさつたか。アお可憐や假令失策が有にもせよ。結構なお二人樣。モアノ殿樣の手荒いには。表も奥も皆難義と。地二人が評議最中に。フシ立歸る師直兄弟。夫と見るより走寄。双方一度に二人が首。水も溜らず フシ討落し。詞コリヤ〳〵次郎左衞門。

外に見付た奴等は無いか。兄弟の奴等が死ざま。露顯しては事の破れと。地云に師泰サレバ〳〵。詞今日は夜に入迄御慰と存じの外俄のお立。察する所此體を鹽冶めだ悟知り。お立を急しと覺へたりと。地聞て師直齒噛をなし。詞ヘエ役にも立ぬ瓦礫た輩に係つて。大切の密事を解悟れ。工んだ事も皆無益事。地ヱ、憎や腹立やと。首も死骸も蹴飛し〳〵。詞一學めが言つし如く仁義立する判官め。所詮味方に付ぬと見へて。今日の座敷を立破りして憎い奴。地宜し〳〵追付勅使御馳走の折柄。失敗らせて目に物見せん。ヲ實に尤と師泰藥師寺。惡事の腰押す天の邪鬼座敷を蹴立て三眞へ立日數

第三

地勅使大納言藤原資方卿。鎌倉に着かせ給ひ。御對顏事終り御馳走のお能を初め。諸事異故なく相調ひ。今日ぞ彌生中の四日。御白書院に於て勅答の式を行るべしと。御用掛の御役人。夜明ぬ内より登城あるフシ武家の行粧花々し。地御饗應の承り鹽冶判官高定。供廻りを下乘に殘し。登城の裝束爽に。近習の役は大星力彌。フシ跡に從ひ行過る。地何とか仕けん見越の松が枝一枝折て判官の。額の上に落係るを。ぬからぬ早速身の開き。落るを見屆梢を詠め。詞ハア風も吹ぬに此松が枝已と折れて落たるはムヽヽヽと。地首傾け。フシ思ひ有氣な御顏ばせ。地聰明力彌が差寄て。詞松は常盤の色變ず。千代の例の若緑。目出度驗に候と。地視し申せば打笑給ひ。詞千歲經る此松の枝。葉榮へて天地の惠を請る若緑も。折ての末はいかならん。地老少不定の世の中と。悄々として入給ふ後にぞ思合せたり。地程も有らせず入來るは。高武藏守師直。人を翅の下に見る大紋の袖立烏帽子。是も家來を殘し置昵近藥師寺次郎左衞門。大須賀團八引連て人なき折を幸ひと。詞コリヤ〳〵兩人。鹽冶めを味方に付んと可惜むだ骨。一學めが異見立故謀反の次第。解悟れたりと覺ゆれば。判官めを仕舞ぬ内は夜は寢られず。今日の勅使の御馳走役を間違はせ。

失敗らせて吳んずと底工略して置たり。地隨分ぬかるな〳〵と。示フシ合して急ぎ行。地御門前には供廻り。馬竹輿沓籠鎧挾箱。侍中間入亂れ何の區別もなき中へフシ急いで皐來る女乘物。小蔭に下し戸を開き。内より出る襠の。繡も目に立當世の。屋敷模樣の風流姿向る旭に雪の膚。解もや爲べき其風情。地向ふの方より用有げに。胡亂胡亂見廻す紺の大なし。互に近寄顔と顔。詞ヤア其方は妹お元でないか。ヤア兄樣元助樣不思議な所でお目に掛った。お前も私も傳吾樣の御家來ながら。親且那樣のお世話にて私は。奥樣かほよ樣へお見出しのお直の奉公。段々出世の此身分。地同じ屋敷に在ながら奥と長屋と隔たれば。お目に掛るは久振。詞おせき樣はお替りないかへ。コリヤ妹。今日は旦那の供先。其樣な事を聞て居る隙がない。ソシテ其方はどうして爰へ。サイナ奥樣から殿樣へ申上る急御用。其方急いで跡から往てお側の衆まで申上よ。畏つたと乘物を急せて參つたれど。殿樣にはモフ御登城。どふぞ御近習衆へ一寸とお目に掛りたい。ム、已も急ぎの旦那のお供で只つた今爰へ來たれば。今日のお供番のお側衆は何某かろくに覺へぬが。宜い〳〵已が旦那傳吾樣へ其譯を申上ふ。地其邊に待てよと云捨て。フシ急迫として走行。地お元は心忙々と。戀し床しの傳吾樣。爰でお目に掛るとは結ぶの神の引合せと。呟く折から片岡傳吾。奥方よりの急のお使。何事やらんと心急。夫と見るより。詞ホ、味な所へお元殿。お出の樣子元助に承つた。奥樣の御用は何事。地承らんと挨拶に。お元はハツト手をもち〳〵。詞お前の御譜代元助が妹の私。奥樣へ御奉公。斯云身分に成たもお蔭。矢張前の樣に元よどふせいと。斯ふせい。仰しやつては下されず。御慇懃なて氣後し。思ふ事が口へ出ぬ。お前の事を浮々と。地暫も忘れかた糸の夜晝分らぬ物思ひ。兼々のわたしが願ひ。叶へてやいのも口の内氣は通つても何處やらが。通らぬぞフシ猶奥床し。詞ハテ扨々埒もない。奥樣のお使御用の筋は何とでござる。サイナ奥樣の御意遊ばすは。此間は打續いて夢見の惡さ取分今朝烏鳴。殊に殿樣お館をお出の時。莞爾には遊してもどうやら濟ぬお心持。思ひ廻せば氣に係る。夫故所々へ御祈禱も言付しが。分て御身の。愼みが第一と。兼々聞ば隨分と。愼遊ばす

様。其方跡から追付て。お側の衆迄申上げよとのお差圖。お前に申せば猶慥。此趣を殿様へ。ヲ、委細畏り奉ると奥様へ申上られよ。我も殿へ其事を申上んと來たり。地サア〳〵早くと云捨て。フシ御門内へと行過る影見ゆる迄見送つて。漸と乘肩輿の。簾を上て目は跡に體は先へ陸尺共足を　三重早めて〻立歸る。地御玄關には諸士の往來。フシ人なき透間。奥よりも。出給ふ鹽冶判官。用有氣に傍を見廻し。詞判官が家來は居らぬか。鹽冶が家來と呼給ふ。地御聲聞て片岡傳吾御用フシ如何にと立出れば。地判官見給ひ。詞供番ならぬ其方何故に來りしぞ。ハア傳吾めが參る事餘の義ならず。今朝御登城の御出掛。毎もの體にて御出有しが。何とやらん其意得ざる御顔色。御様子心元なく御跡より參りし所。只今奥かほよ様よりもお側の女中をお使として。此間御夢見鳥鳴も宜しからず。御顔持も勝れねば。何ぞお心の濟ぬ事あり共。隨分御堪忍遊ばさる様。御意見申上げよとの御使。地思ひ内に有ば色外に顯るゝ女中のお目にさへ其通り。詞傳吾めが存ずるは。此度の御大役に付。何か思召に叶はぬ事を。堪に忍び給ふと見へたり。地釋迦に心經恐入候へ共少しく忍ばざれば大謀を亂る譬。如何様の事あり共堪忍の二字を守り詰御慎の程肝要に存奉り候と。詞の詞身に對ハツト思へど左有ぬ體。詞ハ、、、、發明な様だが道は女。大層なる奥が案じ。夢は五藏の煩ひ。鳥は空を飛行一人の爲に鳴ざれば。是以て當にならず。又顔色の悪きは此間。勅使より下されし御歌の返歌。雲の上人に笑れまいと毎夜寢ず案ぜし故。定めて色も悪かりつらん。其方迄が同じ様に役にも立ぬ物案じ。別してもない事大層らしく他人が聞ば笑ひの種早く歸れ。コレハ又國家老由良之助方へ内用有て。竹輿の内にて認め。只今一間で封じたり。隨分急の飛脚にて。國許へ遣すべしと投出し給ひ早く歸れと。地何氣なき詞に傳吉も少しは安堵。然らばお暇。詞此御狀は。飛脚を仕立五日半にて伯州迄。遣すべしと。地心を殘し立歸る。主從一世の名殘共知らぬフシ別ぞ是非もなき。地判官跡を打詠め。奥へ入んと仕給ふ所へ。立出る樂師寺次郎左衛門。詞申し判官様。先程より御目付中のお尋御前より急の御召。御座の間とて早く〳〵ハツト答へて判官は御座のフシ間指て急行。地師直が工

みにて諸事の手都合伸縮め。一度に迫る御用の品々。判官殿鹽冶殿と呼立る諸役人左こそあらめと師直藥師寺。人の仕損を松の間に。フシほくそづいて居る所へ。地立出給ふ鹽冶判官師直聲掛。詞ヤ判官殿。勅使御馳走の御用を捨先刻から何所へご座つた。ハア御前の御用とござつた故只つた今御次へ。ハ、、、、勅使御馳走の取込は御上にも能御存じ。何で貴殿を召物ぞイヤ其取次は則御家來次郎左衞門。ヤコレ判官樣滅層な。御前の御用有か無を陪臣の此藥師寺。どふして存ぜふ樣がない。ム、然らば先程御目付中のお尋御前の御用。御座の間迄早申た詞忘れしか。イヤイヤ左樣の事此藥師寺申したる覺なし。誓文壞され闇の夜に金拾ふ法も有れ曾て覺御座なく候と。地ひやうまづいたる詞の端々扨は彼奴等が言合せ。我に恥辱を與へんず。工みと心で心を納め。詞なければ師直が。詞コリヤ〳〵藥師寺。構ふな〳〵。仕付ぬ大役氣が逆上亂心したと覺へたり。其樣なうてんつて大事の御用勤まらねば此通り申し上。今日の御用は外へ振替。其過怠には押込隱居。自體出來もせぬ形をして。日比から賢人立は畑水練巨燵兵法。是式の御用さへ勤まらぬ白痴漢。見掛計で內證は放心大名張貫武士。正眞の猿が人眞似。大切の今日の御用間違つてもきよろりくはん。蛙の面に水かけた樣にましくしとしたアノ面付。泥に灸糠に釘。相手に成は俱に白痴ハ、、、、と。地雜言過言主從は。フシのさばり返つて入にけり。地判官も一期の浮沈迚も赦さぬ奴ながら。責て御儀式濟まで堪にこたへる辛抱も。胸に餘りて斑々涙。奥を見遣て。無念泣。地折柄勅使の御立と呼はる聲に諸大名迫々に立騷る。袴の裾も長廊下。權威を高の師直主徒肩臂フシ巍然行過るを。地行過して鹽冶判官。師直待と呼掛る。振返つて。詞ム、何用有て此師直を呼留しぞ。ヲ、愚人に聞す詞はなし。汝が胸に覺有ん。地觀念せよと切付る刀の切先。烏帽子を切割眉間の大疵。血は瀧津瀨。又振上るを藥師寺が後抱に啀と抱。音に驚き大小名八方より落重り判官を引立れば。師直は命が物種藥師寺に助られ。這々一間へ逃込ば。ソリヤ喧嘩よと諸方の門々差固め。上を下へと立騷は鼎の沸　三寶が如くなり。地早速御評議極つて鹽冶判官高定。石堂右馬之丞へ御預と。舁出す網乘物御門をフシ開

き急ぎ行く。地斯と聞より大星力彌御跡慕ひ一散に。御門前へ驅出れば。出合頭に大須賀團八。師直が供廻り主人の仇の鹽冶が家來。ソレ遁すなと追取卷。ホ、、、、。地事可笑や。若年者と侮つて。泣面かはくが笑止千萬。腕に覺への大星力彌。成らば手柄に寄て見よと。地高塀を小栫に取すつくと立て フシ待掛たり。地吻な言せそ打殺せと。息杖振上げ双方より。一度に打を身を替せば。互の天窓打碎。八の字形に フシ倒伏す。詞扨も健氣なお若衆樣然らば大屋へ預けんと。地後抱に聢かと抱く。吻やしやと振解き向ふへ フシ撞さり車投。詞一人立ては叶ふまい。地惣掛りに と立掛るを。片端攫んで人礫。斑り〳〵と 三重投付るは板屋の霰棟上の。餅を投るに異ならず。團八始め下部共群々撥と逃散て指示者も フシ並木の陰。地幽に見ゆる挑灯の跡を。慕ふて。三重追て行

第四

地其本亂れて末治事否じ。鹽冶判官高定。一朝の怒にて殿中の騷動隱れなく。分て封國伯州へは早打數浪を打て告ければ。家中の騷大方ならず。執權大星由良之助吉金。同席沖田將監斧九太夫を始として。家中の面々晝夜を分ず城内に詰切て。又の報知も待遠く フシ堅唾を。呑て並居たる。地由良之助左右を見廻し。詞我君不慮の御災難。殿中騷動の注進は是なる早野勘平。二番手は矢間十太郎。各早打にて馳着我君は石堂右馬之丞殿へ御預の樣子までは知れしかど。其後の飛脚到來せず。地心元なや氣遣と。各眉を顰る折柄。遠見の役目佐藤與茂七。十七歳の血氣の勇者。振亂す大前髪。韋駄天走り息繼敢ず。詞只今東の城外へ人夫數多の早駕は。御注進と相見へたりと。地申す詞も終らぬ所へ。エイサツサ。エイサツサ。エイサア〳〵。多勢の人夫足も空。宙を飛來る早駕を直に座敷へ舁込ば。木綿に腹を聢かと卷。駕より出る大星力彌。長途に屈せぬ勇氣の若者。夫と見るより由良之助。詞ヤア力彌。主君の御樣子何と〳〵と迫立れば。地列座の諸士は一同に フシ顏を守りて控居る。地力彌は居直り。詞扨も去る十四日如何なる意趣にや我君樣。殿中の

松の間にて。執事高の師直を眞二つにと切付給ふ。コリヤ〳〵力彌。お預けに成給ふ迄は早野矢間に委しく聞く。シテ其後の樣子はいかに。さん候我君は網乘物にて石堂殿へお預けと。詞聞と均しく南無三寶。地迫て追付奉らんとお跡を慕ふ道筋に。師直が雜兵共手籠にせんと取圍む。詞シヤ何程の事有んと。地片端掴んで投退。〳〵追散し。地眞一文字に石堂殿の。館を指て馳着しに。表は警固諸士の往來。詞樣子を問ば御評議極り。切腹仰付られて最早檢使も御入と。地聞たる時の悲しさ苦悶さ。主從一世の別れ際咎られなば夫迄と。フシ紛れて奥へ忍び込。詞兼て主君と無二の御中。力彌が顏も御存じにて。情深き石堂殿。餘所ながらの暇乞と襖の陰に我を忍ばせ。地待間程なく。御切腹の用意。詞形の如く檢使介錯座を占れば。情なや我君樣。地無紋の上下白小袖。屠所の羊の歩にて立出給ふ御顏ばせ。詞見奉りし力彌が心中。推量して給べ親人樣と地ワット計に。伏轉ぶ。地心も暗む由良之助。ヤア狼狽たるか悴。詞シテ其跡は何と〳〵。我君少しも惡怖給はず。心靜かに肩衣刎退座を堅め。三方取て押戴き。檢使の方に地向はせ給ひ。殿中を憚ず刄傷に及びし上は。斯有べきとは兼ての覺悟。詞只恨むらくは師直を。討洩せし無念。骨髓に徹して忘れ難し。此辭慎を晴させよと。地我を尻目に見給ひて。九寸五分取直し。腹に岸波と突立給へば。太刀振上る介錯にお首は前にと跡言殘。岸波と倒れ泣沈めば。由良之助を始として。一座の諸士は齒を切り拳を握り翻す涙と。吐く息は。野分の空とフシ夕立を一つに寄しも期やらん。地斯る所へ表より取次の役人罷出。詞只今隣國雲州の太守。仁木左京介樣よりお使者を以て仰越れ候は。將軍家御評議の上鹽冶公には御切腹。去に依て城地。並に國郡召上られ則左京介へ御預。今日中に城を請取申すべき旨鎌倉より早打の嚴命。是非に及ばず追付人數を差向候間。一家中の面々。速に立退るべしと申置て立歸り候と。地言捨てフシ引返す。地重る難義人々は互に目と目を見合せて。フシ軈。果たる計なり。地由良之助頭を擡げ。是非に及ばぬ御運の末。此上の成行各の御了簡フシ承らんと有ければ。地沖田將監取敢ず。詞イヤサ評定も糸瓜も入ず。自體殿中を騷せしは殿の短慮不覺と云物。智惠なしの主人に係って我々

迄難義せんより。殿の貯へ置し金銀財寶を分て取。此城を明渡すより外はない。何とそふではござらぬかと。地詞の尾に付斧九太夫。詞イカニモ將監殿の思召尤至極。併殿の貯置し金銀を一家中へ配分しては。我々一生安樂に暮す程は有まいなれば。何と致そふ。殿の御切腹を深く隱し。此度勅使御馳走の御用金と名付。在々の百姓共へは高割城下の町人共へは面割にして。國中の金を集め。一家中へ配分するが上分別てござらふと。地欲惡無道の評定を。聞流して由良之助。詞ハア御兩所の思召一理有去ながら。此由良之助が了簡は。各方とは少相違。殿中の騷動と注進の初より斯有んと存ぜし故。殿の貯置れし御用金の内。奥方がほよ御前へ差上ると。殿の御菩提所へ寄附は格別。其外の金銀諸道具は。是迄年々御用金を差上し國中の。百姓町人。京鎌倉堺大坂の御用達しの町人共。其外日用の買掛り等迄殘らず返濟致す樣。兼て掛りの役人共へ竊に申渡し置。其通り計ふたりと。地言に兩人迫立て。詞ム、同席の我々へ一應の相談なくなぜ一存で計らはれた。イヤ相談致せば只今の樣に手前勝手の欲心をかはき。末代まで御主人の御名を穢すが氣の毒さに。一存で取計らふた由良之助が誤かと。地理付られて猶逆立。詞シテ一家中の者共明日より知行に離れ何を以て。妻子を育む。其思案云てお見やれ。ハ、、、、事新しき各の言分。罪なき主人の御生害辱尊氏公の命なり共眼々と此城を渡そふや。一家中の者共此城に楯籠り。討手を引受一軍して叶はぬ時は妻子を殺し。城を枕に討死して。主人の冥途の御供と覺悟極し由良之助。金銀に望なし。地旁いかにと詞を待たず。力彌を始竹森矢間早野千崎原佐藤。標悍の兵共口々に。主君に別れ奉り。毎の時をか期すべきぞ。俱に討死〳〵と思ひ。込だる其勢ひ。地將監九太夫減らず口。詞上意を背くは上への恐れ。今一評議して見られよと云捨て。フシ竊々と逃て入。地ヤア卑興未練の犬侍追駈て討留んと。立を押へて由良之助。詞論に及ばぬ知行盜人。彼奴らに構はず各は。籠城の用意あれ。地我も一間で討死の最期の支度と卒爾〳〵に。心を配り入ければ。家中の面々立別れ詰所。フシ詰所へ行折柄。地城請取の刻限と八方より仁木が手勢。城外に馳違ひ異義に及ばば責崩せと。手々に長鎗飛道具フシ事嚴軍に見へに

ける。地兼て期したる義心の輩。思ひ〳〵の物の具固め追々に馳來り。詞ヤア〳〵由良之助殿。寄手城内に入込ざる内。門の堅め軍の手配御下知を承らんと。急に急て呼はれば。地一と間の障子颯と開き立出る由良之助。鎧兜に引替て花田の尉斗目長上下。何かは白木の三方に。一通取載恭しく。捧げ出るを見て悦り。詞ヤア眉に火の付此時節。合點行ざる大星殿の出立。子細いかにと詰寄ば。ホ、樣子言ねば不審は尤。城を枕に討死とは各の志を試さん爲の謀。早野矢間が來ざる以前より。殿中の騒動は兼て知つたる由良之助。其子細は此一通。殿登城の折柄片岡傳吾に渡し給ひ。五日半の早飛脚にて疾に屆いて拜見せり。我君師直を討給ふ謂を記せし御書置。地謹てフシ拜聽。有れと押披けば人々はハツト計に飛逡巡。息を迫て聽居たる。詞書遺す一通の事我苟くも一國の諸侯と生れ。君に仕て二心なく弓矢を執て私なし。然るに執事高師直其身の驕奢增長し。弟師泰と心を協て尊氏公を亡し天下を奪ふ企。御若年の直義公を別莊に招き酒色を以て御心を蕩し。御謀反を勸申し御兄弟の御中を裂。兩虎爭ひの弊に乘事を計らんとの工。知たる者は我許此事縞に尊氏公へ申上んは安けれ共。直義公に御不審掛り。御連枝鎬を削り給はゞ。斯太平に治りし一天下の亂れと成らんは歎いても猶歎かはしく。事穩便に計はんと思へ共。驕に募る師直止るべき勢ならねば。心一つに取納め。勅使御馳走の遺恨に事寄せ。師直を討留て天下の憂を除くべし去ながら。殿中を騷し勅使への無禮短慮不才の高定と。世上の嘲り家中の難義。思はざるにはあらね共。天下萬民の歎には換がたし。若も武運拙くして師直を討洩さば。忠義を思ふ家中の面々心を合せ。師直を討取天下の病を除くべき者なり。三月十四日。鹽治判官大星由良之助へと地聞よりハツト列座の人々。扨は我君殿中にて双傷に及び給ひしは。御短慮にてはフシ有ざりしと鄙入たる計なり。地由良之助は件の一通卷納め。傍なる火鉢へ打込ば。一座の諸士は色を失ひ。詞心得ぬ大星殿。我君師直を切付給ふは場所を知らざる麁忽の仕業と。世上の譏點止難し。其一通こそ亡君の汚名を清むる證據なるを。火鉢に入て燒捨られしは血迷ふてか但又。狂氣ばしせられしかとフシ席を。打て詰寄ば。詞ホ、其咎尤ながら。御遺書に

有る如く尊氏公へ言上せば。謀反を工師直一家亡ぼさんは安けれ共。直義公へ御不審掛り。御兄弟確執に及び干戈起らば。一天下の民の歎を思し召御身一つに引請て。四海を惠御仁心。有難しとも忝しとも我々式が了簡には及び難きフシ事ながら。地主君の心を請繼が。則臣下の心なり。詞右の御遺書世に傳らば扨は。鹽冶判官は短慮にては有ざりしと。主人の汚名は濯ども地將軍のお耳に入ば。再び天下の亂とならん。然らば却て我君の御志も水の泡。詞然るに依て御遺書を燒捨。各と心を協せ師直をさへ討取ば。亡君の御宿意は御存分に立道理。其處を思ふて燒捨しは。由良之助が誤り共いふべからず。地去ながら世の人は。名利の二つに搦れて繕ひ飾る其中に。天下の民を救はん迚黄金を泥に塗藏し。文武兼備の名將の短慮麁忽の汚名を請。國家を失ひ御命を亡し給ふ陰德を。看す〳〵佛神三寶の力にも及ばぬは。天の命數限り有。鹽冶のお家滅亡の時節到來淺間しやと。五臟を絞る血の涙。在合諸士は一同に。フシ涙汲出す如くなり。地由良之助は懷中より。一卷を取出し。詞聞かるゝ通の譯なれば。亡君の御志を繼んと思ふ人々は。此城を明渡し。時節を待て師直を討取より外他事あらじ。是こそは敵討一味徒黨の連判狀。サア孰れも血判と差出せば。地我先と姓名を書記し。指を劈く誓の血判。動かぬ忠義の要石巖とならん磯砒。諸士の默や大石の。フシ美名は末世に隱れなし。地折柄早野勘平は後馳に馳來たり。某も連判に御加へ下されよと。立寄を由良之助。イヤ〳〵詞貴殿は三年以前御抱の新參なれば。譜代相傳の一家中と。一樣には成難しと地聞も敢ず膝立直し。詞コハ由良之助殿のお詞共覺えず。君臣の道を論ずるに。年數には由るべからず。譬ば名作の古刀たり共燒刀なければ用立ず。又は名もなき新刀たり共切るゝを以て鎭邪が劍。沖田將監弁九太夫はお家譜代の生鐵物。地新參なれ共勘平が。心は邪ぬ直燒刀。亡君の切掛給ひし師直が烏帽子首。掃へフシ落して。御目に掛ん。詞去ながら密事を漏さんかとの御疑ひ去事なれば。假令親子兄弟たり共他言せまじき別紙の神文認め置。お目に掛んと取出すは。地日本國中大小の神祇驚かし奉る熊野の牛王に誓ひの文言。由良之助感じ入。詞ホ、神妙〳〵。いざ血判。地ハツト。計に勘平は。差添の小刀拔出し指に突

立。連判狀に確と押。忠臣一味に加はる事。生前の大慶と。踊上つて　フシ悦ぶ折しも。　詞城請取の御役人御入なりと　地騷ぐ聲々由良之助打點頭。　詞上使の御入に甲冑の其體は恐あり。孰れも暫く忍ばれよと。地詞に隨ひ家中の面々一間をフシ差て行跡へ。　地城請取の上使の役目。仁木左京亮頼章。家來引連　フシ上座に通れば由良之助。御苦勞至極と平伏す。　詞ホ、不慮の災難御家の騒動心中左こそと察入る。城請取の嚴命は表向。隣國の左京亮何に寄ず。用事有ば　承らん。　地少しも心置るゝなと。慈愛の詞身に餘り。　詞ハ、、、、有難き御詞。只此上は家中の者共。異義なく立退候　趣。宜しく言上願ひ上奉ると。　地挨拶半へ沖田將斧九太夫。遠慮もなくのさばり出テレ。　詞由良之助めが形態見たか。最前は左も立派に城を枕に討死とは。口は達者な影辨慶。骨なしの腕ずんばい。上使の前へ出た時は塗盆に　蟲。ましくししたあの面付。能見せ物だ箆坊めと。　フシ一度に噴と打笑ふ。　地耐兼て一味の義士。一間の内より顯れ出。　腮引裂んと飛掛るを。由良之助押鎮。ヤア麁忽なり方々。　詞いか程に言ば迚犬の長吠相手に成は長氣なし。上使へ無禮。鎮まられよと。　地押留られて是非もなく。刀の柄を握り詰。齒を噬りフシ堪へ居る。　地兩人猶も勝に乘。　詞人仡の手轉業して見居らぬかハ、、、、　地と嘲る所へ佐藤與茂七矢間十太郎。長持を舁擔はせ。息を切て駈來り。　詞御寶藏の錠捻切長持舁出す不敵の曲者。引捕へ詮議致せば。沖田將監斧九太夫が家來。兩人の言付にて盜出し候由。白狀に及びし故一々に搦置。此長持持參致し候と。　地詞の内より將監九太夫羽繕ひして逃出すを。折重り高手小手に締上締上。重々の極惡人と。寄て勃狩て呵責を。制し留めて由良之助。上使に向ひ。詞御覽の通りの科人共いかゞ計ひ候はん。ム、念の入たる由良之助の詞。此左京介は城請取の役目ながら。各退散なき内は此城は鹽冶の居城。鹽冶の家の盜賊なれば。鹽冶の家法に行はれよと。　地仰は得たりと一味の若者。闕殺しの刀の淺疵。將監九太夫手を合せ。命計は助て給べと泣詫るを起しも立ず。佐藤矢間が太刀先に。頭は轉り山椒味噌。辛目を見て死したりし。　フシ惡の報いぞ心地能き。地左京介諸士に向ひ。　詞城相違なく請取上ば勝手次第に立退れよと。地仰にハツと由良之助。　詞サア何れも

退散有と フシ徐々と立出しが。 詞御先祖代々傳つて。壘高く堀深く。樓の構へ兵糧の用意迄。殘る方なき此城郭。臂韓信孔明が數百萬騎にて攻共。忠臣無二の此勢にて。防戰かふ物ならば容易は落まじければ。花々敵軍して討死せんは安けれ共。主人の敵討ん爲冢々城を明渡す。 地是非もなき世の有樣と。思へば張裂胸の內。一味の諸士も一同に昨日迄も今朝迄も。旭に曜き夕日に映ずる御殿〳〵の結構も。今を限りの見納めと。名殘惜げに視返り。〳〵。涙ながらに出て行世の。盛衰ぞへあぢきなき

第五

地空山寂歷として道心生ず。虛谷迢遙たり野鳥の聲。 フシ浮世離れし山寺の。日の目も見へぬ夏木立。岩に滴る水の音。最も淋しき三昧に。見る目妨嫌草の庵。早野勘平重次は。主君の國を立去て。一先歸る古鄕の空。母の別れを悲しみて。墓所の傍を立去らず。喪に入る日數假初に。脇目も觸らぬ五十日。 フシ奇特と云も愚なり。 地墓所頂る西念坊。靈供香花携へて。庵の內に直し置。 詞アイ勘平樣。お賴の品々上ます。ほんにマアお前樣は。當春お家の騷動故御浪人。伯州からお歸りなさると其儘。此墓所へ引籠。喪に入るとやら云儒者の敎。麻上下を着詰にして。鱸子張返つてござらしやる。其上朝夕の上物は粥計。イヤモ一日も眞似は成らぬ。常精進の私らでも。折々里へ出た時は。鰻鱺の樺燒煮拔鷄卵。沙汰はない事してやらねば腹持が堪ませぬ。坊主と蒟蒻は田舍が能と世の諺。此山寺に住居する私らでさへ其通。繁華に住居の和尙達は猶以てと思召せ。お前樣も內證で。些少は大事ござりますまいと。 地口も心も婆坊主。 詞イヤ〳〵父母の喪に入時は。口に甘きを喰はず。樂を聞て樂しまぬが聖人の掟なりと。 地堅く出られて天窓を搔。 詞旨い物が有ても參らず。毎日仕掛る娘子を。けんもほろゝに追歸す。扨々在家方と云物は。辛抱の强い物。わしらも今から還俗しては。結句身持が六ケ敷。 地炭の折か木の端かと云此坊主。 詞先が近いと思ふ故。却

つて未練な心が起る。落そふて落ぬ物は。廿坊主に牛の睾丸。落そむなふて落る物は。五十坊主に鹿の角とは。テモ能ふ言た譬じやと　フシ呟き〳〵立歸る。　地勘平は立寄て。墓に手向の香花や。靈供の膳を目八分。石碑の前に備へ置。遙下つて兩手をつき。暫涙に耽けるが。　地稍有て顔を上。　詞ハア母人樣へ申上奉る。主君の供の鎌倉詰。留守の間の急の御病氣。報知の御狀の屆ぬ内。お家の騷動早打の使。夜を日に繼て歸りしが。道中よりの胸さわぎ。通筋の事なれば我家へ立寄しに。棺を舁出す我門前。何人の葬送成ぞと。聞も悲しき母上は。三日以前に御死去の由。又鎌倉の物語。取亂したる心の當惑。　地烈しき父に諫られ。御葬送のお供も叶はず。旗天蓋を餘所に見て。胸も轟く火急の使。夢路を辿る　フシ心地なりしぞや。　地剩へ御國にて御代々住馴し。御城を明渡し。一家中は皆離散。我も古郷へ歸りしが。　詞御病中の御看病。御葬送の御供も叶はざる身の申譯。せめてもの罪亡しと。此所へ引越て。寸志許の御奉公。祭ること在が如しと。本文は有ながら。　地變果たる石塔の。文字に殘る　詞を。母と拜する計にて。お顔も拜ま ず我子かと。只一聲のお詞を。聞事さへならざるは。親に緣なき勘平が。武運に盡たる不孝の罪科。お赦されて下さりませと活たる人に言如く。石壇に兩手を掛。悲歎の涙に昏居たる心の。内ぞ便なけれ。　フシ行水に數書よりも果敢なきは。思はぬ人を思ふなりけり玉鉾の野路山道辿來る。東來西去の振袖の。所に目立。風俗はお春といふて勘平に。親の許せし云號。　地下紐はまだ解やらぬ思ひを包む吊物。下女のお龜に取持せ。お顔が見たさ逢たさに。急がぬ道も墓詣り。勘平が後姿。物言たげに。囁嘯をお龜が傍から鈍しがり。走り付眞似。抱付眞似。打たり舞たり耳に口。　詞斯云て恰云て。　コレ　地其跡は斯してと。氣を苛つ程。猶恍惚子氣の顔は上氣のはぢ紅葉。　詞エ埒の明ぬと突遣れば。　地ヲ、危險やを鹽にして躓く拍子勘平に。抱付ば振返り。　詞ホヲお春今日も又墓參り。雨上りで道が悪い。　地こて怪我は仕やらぬかと。　地何氣なく云顔付に。急に詞も出そゝくれ。アイ　地と云さへ唇の。動き兼るを年の効お龜は傍から鈍敷。　詞エヽいかに恍惚子育じやてゝ。知れた通詞を埒の明ぬ。　地お春樣の名代に。私が代て言やんせふ。　詞コ

レ勘平様お果なされたお袋様の爲には。現在姪御のお春様。お前とは從弟同士。惚てござるを幸ひに。お留守の間に呼取て。鎌倉からお歸りを待てござる其内に。お袋様は急の御病氣。終冥途へござらしやつた。臨終の際にもコリヤお春。勘平が歸つたら精進も回向も入らぬ。一時も早ふ婚禮して。玉の様な初孫を。産て呉とおつしやつたは。親且那様が證據。地手入ずの箱入娘。初物は七十五日。留守の内から陰の膳。蒸立の腰高饅頭。お前がお歸り成されたら。晝夜なしに引付て。詞フウスウを聞ならば。近所隣の私らへ。難義が掛ろと思ひの外。詞金魚では有まいし。寝に入とやら堅苦しい。此小屋に上下着て。參詣のない開帳場の。世話役を見る様に鯱子張てござらしやるとは。去迚は悪い物好。地斯云事を子細らしう。物の本に書殘し末世の女子を困せる。唐の孔子が聞へぬと。お春様の恨言。是から了簡切替て抱て寝て上なされ。詞ア、餘りつべこべ喋つたら息が急む。サア此跡はお春様。直々に陳しやれと。地突遣れて漸、に。恥しいやら怖いやら。動悸胸を押鎮め。ほんに浮世は味な物。地お留守の時に思ふには。お歸り有たら彼是と。待に待たる甲斐もなふ喪に入日數も五十日。お墓參りの度毎に終一通の挨拶で。情らしいお詞の無いは私が不束。お氣に入ぬかお嫌ひか。詞お前は土性私は金夫婦中能子も多く。萬地心の儘なりと。能ふ見て置た三世相。よもや嘘では有まいと。樂しんだも虚事か。詞叔母様がござるなら。今迄捨て置やなされぬ。毎何時でもお歸り次第。婚禮せよと仰しやつたに。違ひのないは此石塔。地成ふ事なら只一口。お詞添て下さんせ。叔母様喃と石塔に縋り付たるあどなさは。フシ惚子にも又可愛らし。地勘平も心根を。察し遣たる折柄に。西念が案内にて尋來る佐藤與茂七。夫と見るより勘平は。コレハ〳〵と手を打て飛立程のなつかしさも。互に包む傍の人目。詞コリヤ〳〵お春様子有て彼お方と。密々咄す事がある。サア〳〵歸れの地差圖に是非なく。言殘したる數々を殘り多げに囁嚅と立兼るをお龜が引取。詞ソレ御覽じませ。鬼の來ぬ間に洗濯せぬと。毎でも邪魔が這入物。今日も又虚足。ほんにそれそれ。地お土産のお菓子忘れたと。帛包を庵へ投込浮ぬお春を伴ふて元來しフシ道へ立歸れば。地西念坊も一禮し。

寺内を指て列れ行。地勘平傍り見廻して。詞ハア珍しや與茂七殿。此方よりこそお尋申筈なれ共。御存の拙者が身の上。せめて母への申譯と。斯る時宜故御無沙汰計り。大星殿にも御堅勝。一味の衆誰々も。替りし事もござらずや。されば〳〵。此與茂七は當春より。知縁有て大坂住居。フシ情なきは世上の取沙汰。鹽冶の家來吝嗇にて。賄賂をせぬ故に。師直に恥被され。殿中を憚からず。切掛しは短慮の至りと。聞たる時の無念さ悔しさ。そふて無との言譯成らねば。胸を擦つて堪へる苦悶さ。地天下の爲に御身を捨。仁義を守る御主人を。凡俗共の口の端に。掛る例も有事かと。鬼を欺く與茂七が。拳を。握る眼に涙。地勘平も跡先を。思廻せば廻す程。時の不肖と云ながら。文武兼備の御主人の。本意なき御最期お家の斷絶。暴悪無道の師直は。權勢强き日々の奢り。天道は是か非か。悔しい無念な與茂七殿。詞ヲヽ冥途に御座る我君の。嘸や無念の御胸中。地想像れてお最愛いと。互に手に手を取合て無念涙に。眺けるが。地勘平は目を瞬き。詞此上は片時も早く敵を討用意が肝要。シテ。出立の時候はいかに。ヲヽ其爲に來りし與茂七。大星殿も國を立て都。山科に假住居。申談する事有て先月の末夜船にて大坂へ下られ。某が旅宿に逗留。又先達て鎌倉に居を構へたる。堀尾嘉兵衛を始として一味の者より頻の催促。未だ時節は至らねど。鎌倉行延引せば。一味の者共待兼て。下慮の事有んも知れず。一先下りて兎も角も計はんと。大星殿にも明日は大坂を出立。貴殿をも御同道。右のお知らせ申さんと。お宿所へ參りし所。未だ母公の喪中故。寺にと聞て取敢ず。直樣是迄參つたり。ハアお使からと云。忝いお知らせ。母の喪を勤るも今日で五十日。幸忌も明なれば。明日はお供せん。ヲヽ然らば由良殿同道にて。明日お宅迄お誘ひ申さん。併世を憚る我なれば。普化僧に出立て。參る時刻は九つ過。地笛を相圖に出立有れと。云に勘平勇み立。詞ヲヽ面白し〳〵。兼て約せし一味の人數。忠義の二字を頭に戴き。地無念の劔の刄を研立て。必死を定て攻寄ば。譬敵は鐵洞に籠るとも。云何フシ助て置べきか。詞ホヽヽヽ言にや及ぶ。地奬噲項羽阿修羅王。鬼でも蛇でも一挫。師直めが素頭は一味の者の手裏に有。詞シイ音高し人や聞く。萬事は明日〳〵と。

地互に劣らぬ忠臣義士。引別れてぞ　三重〳〵立歸る。

第六

地前栽の榎も幹も世を拗強て所に目立衙門。攝州早野芝村に數代絶さぬ弓矢の道。早野七太夫重吉と云ふ鄕士有。文の道にも暗からず仕官の傳も公の。祿は其身の鋤にて彼犧牲の世を憂しと莊子が跡をフシ老の坂。地妻に別れて。便なく。暮すも夢の五十日一子勘平が忌明を。地待儲けたる云號心お春が急々と今宵祝義の下垂下地。內輪同士も一生に。一度の曠と花餝る座敷の。掃除島臺も千歳を祝ふ竹に鶴下女のお龜も首延し日暮をフシ松の若緑。地俱に浮れて申お春樣。詞親且那樣の仰しやり付成された通り。是で何も角も皆揃ふた。是から勘平樣がお歸りなされ御祝言のお盃。三三九度が濟と其跡が色直し。其跡がお床入。其跡が〳〵ホヽヽヽ嘸お嬉しかろお浦山しいと。地脊中をとんと擲かれて。又お龜のしやら〳〵と。詞大な聲して父樣に叱られふぞや。嬉うなふて何とせふ。勘平樣とは從弟同士幼少から知合ふた中。アヽ好い殿御じやどふぞ夫婦に成たいと思ふ內。三年以前に鹽冶樣へ御奉公。間もなふ鎌倉へお供故合離と力落し。神樣や佛樣へ種々の立願祈願。地月に三日の火の物斷。思ふた念が屆いたか。詞お果なされた伯母樣が。夫程に思ふなら添せて遣ふと此內へ引取て。鎌倉からお歸りなさると其儘。鹽冶樣のお國へ嫁入する積りで有たが。此三月伯母樣はお果成れる能事は重らず。地鹽冶樣のお家の騷動。どふせふと思ふて居る內。勘平樣はお國から歸ると其儘。喪に入とやらで御墓所へ詰切。昨日迄で五十日。今日忌明てお歸り。直に婚禮させふと有難い伯父樣のお指圖。嬉しいに付ても伯母樣の御存命なら。嘸お悦なさるで有ふし。私も又何角に付て心細い。然して今日もモフ八つ下り。此勘平樣どふしてお歸り成れぬと。地戀と無常を取交て待間鈍けくフシ投首に。地お龜はフツト吹出し。詞ホヽヽヽ取付もない。いかに待兼なさる迚未だ四つ過に外ならぬ物。八つ下りとはモ減層な。併

待に待た糟糟様お心急も御尤。勘平様は今朝お寺でお髪月代成され。お薩送のお供にござつた。庄屋殿始村中を禮に
お廻り成される筈と。先刻に五助が申ました。追付お歸りでござんしよと。フシ咄し半へ三人連。近所隣の百姓共。
手々に酒樽肴臺縁先へ並置。詞アイお春様夫にござりますか。今日は勘平様のお忌明。殊に晩には御祝言彼是のお
悦びに。次郎助茂七權九郎が。參りましたと。且那様へ仰しやつて下さりませ。モコレハ近比輕少の至りながら寸
志計の御祝儀でござります。是から鮒折出世鯛。目出度鯛の進上物。宜しう頼上ますと。地云も律義の百姓氣質
詞ヲ、孰方も御念もじの御進物。此通伯父様へと。地立んとする一間より。詞ヲ、身が夫へ出て挨拶と　地立出る七
太夫。昔作りの固親父鮟鞴の大脇差を指強らし。悠々と座に直れば。お龜が心得進物を。フシ目通に並ぶれば。地莞
爾に打詠め。詞ム、孰れも閑しい時分打揃ふて來るさへ有に。謂ぬ進物過分至極に存ると。地挨拶すれば。詞ハイ是
は〳〵お禮に痛入まする。今日はお袋様のお忌明。勘平様がお歸りなされ。御婚禮が有と承りまして。日比お世話
に成私共迄お嬉う存じます。夫に付て彼の今の事。お尋申て見様かいノ茂七。ヲイノイヤモ別の事でもござりませぬ
が。勘平様は此在所へお歸りなさると其儘。お袋様のお墓所に矮小けな小屋懸して。忌明の今日の日迄只一人。徒空
としてござらしやるは。合點の行ぬ事じやと此中も此次郎助が。鳥渡お尋申たれば。喪に入とやら云事で。唐には不
斷する事じやと計おつしやつたげなが。どふも理屈が解りませぬ。どふした事でござりますと。地尋に微笑。詞ヲ、
譯を知らねば不審は尤。都て聖人の敎には。三年の喪は天下の通喪なり。人生れて三年の内は父母の懷を離れ
ず。抱拘の大恩を忘れぬ爲。父母死すれば三年の喪の入と唐の掟。幼少から學問の端緒を敎た悴。已は奉公嫌ひなれ
ど。若い者の一度は主取さするも宜らふと。主人を見立鹽冶殿へ奉公に遣し置しが。當春の騷動早打の注進。鎌倉よ
り伯州迄二百里の行程を。七日の早追急の道。此早野村は。海道筋の事なれば。其譯を我々に知さん爲に立寄しに。
三日以前に母が往生。葬禮の出る所此門前にて行逢し其時の悴が心。思ひ出すも胸塞がる。歎の中に鎌倉の樣子聞ば

火急のお家の大事。母が葬送所ではないと。直に追出お國へ遣しが。其後悴は歸つたれど一方ならぬ母の別れ。殘念に思ふかして。墓所の傍を離れぬは彼喪に入と云敎の道。去ながら唐では三年。日本では五十日が定る忌中。國風に從ふが則聖人の敎を思ふかして。今日歸らふと云ふ幸。死んだ母が遺言なれば此春と今宵の祝言。人間萬事塞翁が馬迚。善も惡いも樣々に。移り換るが世の中と。地口には言ど心には。思ひ出したる妻の事。紛らす芬の火入さへフシ涙に濕る計なり。地ひよんな事云出して百姓共は手持なく。詞ハイ夫で謂が氷解と知れた。親孝行な勘平樣。廿四孝の數が殖て。廿五かうの光が映。立身出世は今の事。モフお暇申ます。ヲヽ皆お行やるか過分〳〵。アイお春樣。地おさらばと打連へ立て出て行。地跡打詠め七太夫。詞コリヤ〳〵龜よ。モフ勘平も歸る時分。歸らば直に精進落。膳の拵云付ろ。地アイと諾も忙しなく。勝手へ立て。行川の流は絶ずして。併も元の水にあらず。昨日と替り今日と暮。愁氣月日の五十日。移るは早き光陰の。矢猛心も凋々と。立歸る勘平が。禮義崩さぬ麻上下。夫と見るよりお春は嬉しく。詞アレ勘平樣がお歸りと。地心急々フシ出向へば。地徐々と打通り。父が前に兩手をつき。詞先以て御機嫌の體。大悅至極と相述れば。ヲヽ其方こそお主の災難。千辛萬苦又候。母の別れに心を痛。其上久々の閑居。いかゞ有んと案ぜしに。地無事で歸つて嬉しいと親しき詞に　詞ハア御存じの主君の成行。剩幼少より一人子と姑息され。寵しみ深き母人の。御病中の介抱は扨置。僅の日數で死目に後れ。地お葬送を餘所に見し。又と世になき不孝の罪。是非もなき身の上やと涙に。咽ぶ計なり。地父は態と勵を付。詞ホヽ其歎は然る事ながら。鹽冶殿の滅亡は。假初ならぬ大家の興廢。天の命ずる所なれば。思ふに任せぬ世の成行。又母へ不孝と思はんが仕官の身は。主の爲に親しきを忘るゝ例。是以て不孝に非ず。死んで生れて生れて死ぬ。環の端なきが如く。家の血脈連綿と。子孫を殘すが先祖へ孝行。夫に付此お春。知る通り姥が姪にて。兩親もなき孤。其方に嫁さんと留守の内に呼取置しが。母が病中にも此事計。息有る内に勘平と婚禮させ成ふ事なら初孫の顏が見て死たいと。病苦も厭はぬ餘迷言。地死だる今

はの際迄も。明日にも勘平が戻つたなら。忌の内で有ふと儘。祝言させて下されと。吳々との遺言なれど。詞世間體も有物故。五十日は遠慮したが。最早忌も明たれば。誰に遠慮の筋もない。幸今日は日も能ければ。今宵直に婚禮させんと。用意して待て居た。地其通り心得よと他事なき父の詞に悦り。兼ての大望其上に。今日出立の契約。暇乞をと思ふ矢先。延縮ならぬ父の云付。ハツト肚胸をつくフシねんと。暫詞もなかりしが。地心弱くて叶はじと。詞ハア今日は改めて親人へ御願ひ餘の義ならず。主君鹽冶公に別れてより。斯浪々の御身の上。只今在所へ引込て土堀りと成此儘に朽果んも殘念なれば。古朋輩と申合せ鎌倉へ立越。今一拵致さんと則昨日云堅。今日旅立の約束。地存立たる事なれば。今暫く婚禮を御延下され。出立の御暇偏に願ひ奉ると約束堅き密事の神文。夫とは明て岩本の。神に願ひを懸まくも。忝い伯父樣のお許の出たる今日の婚禮。振捨て旅立とは。苛酷や難面や胴欲と。胸に餘れど口へ出ぬ。娘心の囁嘯とフシ心遣ぞ行瀨なき。地父は默々打點頭。詞ム、若き時は血氣强く。人に負まい劣るまい。立身出世を搔手繰樣にと思へ共。俗に云惠方果報。求て來ざる者は富貴。去るに依て昔より。賢人君子も世に協はず。山林に遁れ市に隱る。仕官の望無用〳〵と。地止る詞を押返し。詞コハ父のお詞共覺へず。君に仕へて用ゐられず。其上の隱遁は格別。我は時に遇ふまいと。初より看破るは。却て異端自暴自棄。地思立たる念願なれば。是非鎌倉へ立越て。今一稼仕らんと詞を盡しフシ言廻せば。地ずんど立て七太夫。進物の看臺兩手に持。勘平が前に並置。詞コリヤ悴。最前村の百姓共が。今日の祝儀と持參せし此看は。三歲童も知つた鯛と鯉鮒。鯛は大海の洋中に育。鯉鮒は淵川或は又。堀溝の泥水に生育。譬ば堀溝は此早野村にて。鎌倉は大海の如く。言ねど知れし大小上下。大海の其中には。鱶鯨の大魚多ければ。諸國より集る人其大魚を羨共。貧福貴賤は夫々に。皆天道より產分て。ぎやつと云より定る運命。いか程廣き大海の中に生育ても。鯉は矢張鯉にて。鱶な一生鱶なり。又溝川の泥水に。撮千魚や。泥鯨と同じ樣に生育たる鯉なれ共。地時節來れば自然。龍門の瀧に逆上り。龍と變じて天に至れば。雲を起

し雨を降す。詞鎌倉に乞丐も有ば。強ち人の立身出世。場所柄にも據るべからず。六十餘州の諸侯の内。撰に撰んで仕へたる。鹽冶のお家滅亡し。母が葬禮に行逢ながら。供する事さへ叶はぬは。能々運の甲斐なき其方。現世の果を見て過去未來を知ると云佛の敎。鎌倉行を思切。老たる親を養ふが順の道。合點が行たか勘平と。地拔指ならぬ理の當然。何と言べき詞もなく。差伏向て フシ野案顏。地お春は氣の毒コレ申し。詞あれ程に仰つしやる事。一つとして無理はない。ツイアイと云て下さんせよ。地心をあせればアイヤお春。詞得心しても一應で。アツト云はぬは若氣の習ひ。奥で緩と思案せよ。地我も休息いざ來れと。詞に是非なく打連て奥の間へ指て入にけり。勝手は兼て云付の。料理拵へ咄た嗟た。味噌摺音も賑はしく。フシ稍時移る計なり。地梓弓引は返さぬ武士の。忠義一途に勘平は。旅の用意も匆々に。一間を密と忍び出傍見廻し何處かは。駈出せしが立留り。フシ立つ坐つの胸の中。お主の敵討事は。假初ならぬ大事なれば。譬親子兄弟たり共。口外せまじに云堅め。神文の密事故夫と明さず立退共。御存じなければ嘸や嘸親人の御怒。二つには又云號の女氣に我を恨みん不便やナ。出ては再び歸らねば。今ぞ親子一世の別れ。育し我家の見納め。先立つ母の顏迄が目に點映て後髮。勇氣も撓み茫然と。フシ暫涙に昏居たる。由良の戸を。地渡らぬ先に棹絶て。行衞も浪の海漚や逢ば。どふして。斯いふてと尋る目先にお春は目早く。仄と見るより。詞ヤ勘平樣。其處に何してござんすと。地寄を突退一散に。物をも言ず駈出す。袂に縋てコレ申し。詞只た一言聞て給へ。妾を嫌ふて此内を。立退程の御心底。何を言ても空吹風。苛共不便な共。思す心は露塵程も。地有まいけれど。又詞わたしが身にも成代り。地想像て下さんせ。一つに育た從弟同士。子供遊びの飯事に。何の譯なき女夫事。嫁入事の戯れにも外の者とは。詞否々々と。お前も。地私も言たのは。結ぶの神の帳面には。疾に記して有そふなと。智惠付程猶種々に。案過しの數々は。物の言樣。詞粧振でも。地お前も。覺へてござんせふ。東の留守の氣扱ひ。祈た念が屆いたか。伯父樣や伯母樣が。添せて遣ふと引取て。悅ぶ内に種々の障りも漸日數立。今日婚禮と指を折て。待に待

たる甲斐もなふ。嫌ふて家出さしやんすは。東の空は色所。定て深い約束の。女中へ心中立なさる。お前は夫で立ふけれど。わたしが體は置去の。谷の梢の木守と人に指ざし笑はれて何と。存命居られふぞ。寧そ殺して下さんせ。死でもお前の手に掛れば。詞私や本望でござんすと。地積々し恨の數々口說立〳〵。どうど轉びて。泣沈む。地勘平も諸共に悄る心取直し。詞イヤ〳〵夫は悪い呑込。全く其方を嫌ふでなし。一先鎌倉へ行ざれば。朋輩共と言合したる約束濟ず。遂立歸りの道中。長うて二十日か三十日。戻つて緩りと婚禮せふ。親人が見付りけ悪い。機嫌能う遣つて給と。地振切て行んとするを。詞イヤ〳〵〳〵何ぼでも放しはせぬ。行いでならぬ事ならば。サア〳〵殺して下さんせと。地戀の聲天情の罠。フシ詮方盡たる折柄に。詞ヤア不孝者め其處動くなと。地立出る七太夫杖振上て勘平が。脊骨も折よと打据〳〵。怒に涙嚙ませて。詞ヤイ。人で無しの畜生め。年寄た親を捨。可愛そふにあれ程迄。戀慕ふ女房を。置去にして家出するからは。扨は已。東の在番中。君傾城に誑かされ。末は夫婦に成ふ抔と。腐合ふた奴へ心中立。親の添せる女房の顔見るも嫌に成。寺へ往たとは夢にも知ず。母の別れを悲しみて。喪に入とはア、若い者の奇特な事。學問させた一德と。心で思ひ折節は。人にも咄して悅んだが。今では悔しい面目ない。六十に餘る親迄を白痴にする。論語讀の論語知らずめ。忠孝は車の兩輪。親に孝なき者は。必ず君に忠なき本文。最前もまだ〳〵と鎌倉へ出て奉公稼。出世が仕度と吐居る。コリヤ。ヤイ忠臣は二君に仕へず。心有侍は追腹さへ切ではないか。主と頼んだ鹽冶殿。殊に新參の樣には思召ず。格別の御厚恩お取立に預つた。其大恩の御主人に。別れて三月に成る成らず。御恩を忘れた道知らずめ。地お最愛や鹽冶殿。短慮と云ふ物の。能々立ぬ譯有ばこそ。殿中での御辭憤。詞其辭憤も晴し給はず。無敢御最期お家の斷絶。目指敵の師直は。麗々と徘徊するを。已等は無念な共何とも思はぬか。鹽冶の家來も數百人。榮耀榮花に育置は。萬一の御用に立ん爲。飼養ふ犬も主の爲には恩を知仇を執ふ。城渡しの折柄も。よもや寥々とは立退まいと思の外。由良之助を始として。侍らしい根性を持た奴輩は一人もなく。牛蒡程の

尾を振て逃屈。犬に劣た蠅虫めら。朱に交れば赤ふ成と。己も性根が腐たか。コリヤ同じ旅立でも。お主の敵が討たい。鎌倉へ行たいと願ふなら。此家屋敷田畑を賣拂ひ。乞食非人に成迄も。貢で敵討せて遣る。形は窪ど心は窪ぬ。己が様な人でなしを子に持て。年寄の業曝すより。死だ姥は仕合者。地チエ、憎や無念や腹立やと。髻抓んで蹂付。怒の顔色朱を注ぎ。翻す涙はフシ夕映に。雹を降すが如くなり。地勘平が身は絞木にて。油抜るゝ苦しさ悶なさ。由良之助と言合せし敵討の計略を。明して怒を宥めふか。イヤ〳〵〳〵。一旦武士が言堅めし。詞は金鐵金輪際。天が崩れ地が裂ても。密事は口へ出さじと。堪忍ゆる辛抱は丈夫にも又。フシいぢらしし。地早刻限も晝下り兼て約せし由良之助。跡に從ふ佐藤與茂七。人目を忍ぶ薦僧出立。門前に彳みで。吹奏す。フシ相圖の尺八。地肝に答て勘平が駈出さんと身繕ひ。詞ヤ何方へ〳〵。此親が目の黑い内動そふか。己が意地を立おれば。此親は六十年。言出した事變ぜぬ片意地。サア一寸も動いて見よと。地親子の愛も鮫鞘の。鯉口寛げ奥齒を鳴し。詰寄詰寄る怒の涙。夫れと知ねば表には。猶吹立る尺八に。勘平は堪兼。差添拔手も見せばこそ。腹にがばと突立れば。惆章くお春が介抱。我强き父もフシハツト顚倒。地手負は屈せず聲張上。詞表にご座る御兩所様。御入有て勘平が。身の成果御見屈下さるべしと。地云聲不審と兩人は。笠脫捨て内に入。此體見るよりヤア。何故のフシ生害。なるぞと驚けば。地手疵も厭はず身をへり下り　詞ハ、、、、面目もなき御對面。御存の拙者が身の上。母の喪を相勤。昨日迄寺に在しを。與茂七殿の御出にて。今日鎌倉への御出立。御同道仕つらんとの契約。あれなるは父。是なるは云號の女房ながら。神文の密事なれば。聊口外せざる故。夫とは知らぬ父が怒。お主の敵討もせて。奉公稼剩へ。親女房を捨ると有ての打打嚮く。地密事を明言ば神文に背き。明さねば鎌倉へ。出立叶はぬ身の因果。詞一味の衆へ言解の此切腹と。地血汐に爭ふフシ無念の涙。地聞て驚く由良之助。詞亡君の敵討は假初なら大義と云ひ。譜代相恩の家士さへ。恩を忘るゝ此時節。況て新參の貴殿なればと。念に念を入過せし。由良之助が詞を守り。道を立義を立る。御親父へ深く隱し。此時宜

に及びしは由良之助が一生の誤り。地可惜武士を殺せしは殘念。至極と後悔涙。地七太夫は飛退去。詞扨は承り及びし大星殿にて御座るよな。某こそ勘平が。親と名乘も面目ない。只今の詞の端々察する所。一應敵に油斷させ。一味の臍を堅め置。不意を討んず謀。斯る大事は親子の中でも。明さぬ筈と云所へ。氣の付ざりしは我愚昧。片意地に言募。腹切せたは此親が手を下して殺した同前。不調法共。誤共。言譯もなき老の命。地御兩所の手に掛て。殺して給と搔口說。勘平苦しき息を纔。詞親父樣の御得心。今のお詞聞たるは。此上もなき身の歡び。コリヤお春。我迚も岩木ならねば。慕ふて吳る志。嬉しうなふて何とせふ。然ながら。大事を抱し身の上なれば。執着を殘さじと。心で心を誡めて。態と難面待遇せしは。主人に仕ゆる武士の義理と。諦めて了簡せよと。地云に猶更嗟上げ。其お詞を聞からは。恨は更々なけれ共。何を云ても此深手。譬難面お心でも。豆でござればどふぞして。添れる樣にも成ふかと。心の頼み佛神を。祈る力も有物を。嬉しいお詞今聞て。今別れるとは何事ぞ。詞最前も村の衆が。親孝行な勘平樣。二十四孝の數が殖て。二十五孝の光が耀そと。云た詞が何とやら。氣に掛たも今思へば。物のしらせで有たかと。譯も涙にフシ取亂し身も憂。計に見へにける。地俱に不便と由良之助。手負の傍に立寄て。詞其許の切腹。大死とばし思ふべからず。數百人の家中の内。高祿を汚したる沖田將監。斧九太夫を始。手の裏返す不義表裏。漸殘る四十餘人も。首尾能う敵討迄の艱難を忍び兼。心替りも有かと。是迄心安からざりしが。地貴殿の義心を聞傳へば。一味の者の心魂に染渡り。氣を引立る良藥妙劑。夜討の先駈高名には。遙勝りし手柄なれば。地今迄の馬廻百石の知行に。二百石加增して。殿の近習に立身させん。せめてもの思出と。地鶴の一聲身に餘り。三人アツトフシ平伏ば。地與茂七は手負の耳際。詞コリヤ勘平。敵を討んと種々に。骨を折ても離れ物。若も敵が病死するか。運盡て返り討に討るれば。末代迄の業曝しと。思へば夜の目も合ぬぞや。此方は先へ腹切たて。大星殿の御褒美に預り。立身加增は尸の譽。人は一代名は末代。ヱヽ浦山しい自似たいと勇猛血氣の兩眼に班々々と。フシ翻るゝ涙。地勘平は

目を見張。詞イヤ〳〵體は存命でも。亡君の御恩を忘れ。敵を討志のなき奴原は。死だも同前。勘平が身は死る共。魂は死ぬ〳〵。彼唐土の伯有は。死ても敵を取死し。我朝の菅丞相は鳴雷と成て怨を晴す。見よ〳〵勘平が魂魄は。東の方へ飛去て。主君の敵高師直夜討の時節を待べしと。地柔和の相貌引變り。睚裂て髪逆立。腹十文字に掻切て。臓腑を一つに抓出し。直許と立て眼も閉ず。目にこそ見へね魂魄の。虚空に上れば亡骸は。噇許倒るゝ武士の。最期の念ぞ。フシ醜しゝ。地父は人目を恥らひて。泣ぬ顔する氣は眞闇。二人の義士は心根を。想像つたる涙の熟湯。お春は在に有れぬ思。死骸の双物取直し。自害と見ゆるを七太夫が。押留むればイヤ〳〵〳〵。詞せめて跡から追付て。未來で夫婦に成が樂しみ。地死せて給べと身を急悶ば。七太夫は兼堪。詞ヲヽ死たいも道理じや。日比戀しい〳〵と待に待た勘平。適歸つて先刻には。鎌倉への旅立さへ。本意無がつて留た身が死て退たりや猶更に。附て行たいと思やるは尤じやが。コリヤ。能ふ物を合點せよ。質直な樣でも生付。意地の張た悴め。今の最期の詞では。死でも未來へ行はせぬ。敵討が濟迄は。魂は此世を去ねば。其方が今死にやつても。三途の川や死出の山で。一人胡亂〳〵迷ふで有ふ。地思ひ留つて吳やいと。強きは反句虚折の。泣出しては フシ留度なく。涙淵なす計なり。地見る目に堪兼由良之助。落たる双物取上て。詞長松の本に清風有。御親父の養育がら。故類稀なる忠臣烈女。責て一人は存命て。舅を育み亡夫の。跡弔へよと。地お春が黒髪。切て添たる亡骸を。野邊の送りの營と。心を籠し一包。先立も又。後るゝも何れ殘らぬ死出の旅立。詞然らば。おさらば。おさらば。然ば。地フシ人目を忍ぶ。天蓋や涙に濕る歌口も。鵲の巣籠子を思ふ。親の心は東西分ぬ。虚空の闇。添れぬ妹背の。戀慕流し。袖は乾ぬ。五月雨。空にも聲の山子規。鳴く音も若や魂の我を呼かと振返り。俱に血を吐。憂思ひ。泣々。別れ三重へ行空の

實に鎌倉の眞中に。金銀融通名にし負ふ　フシ兩替町の。裏店に。資本も細き元助が。凌兼たる盆節季雨や霰と降掛る諸方の書出し債乞に。　フシ内を蟬脱の空衣。地氣の毒顔に女房おせき。聖靈棚の補理に。地蓮の葉芋殼索麺を佛へ豆瓜茄子。我のみ世話を燒米や。思へば愁氣溝萩の。　フシいつかは時に青梨子林檎。　フシ取散し門口より。詞によつと這入大屋太郎兵衞お内義樣嘸取込。地ホヽ、大屋樣能こそお出。詞マデ〳〵是へ。詞イヤ上つて居られぬ物節季。元助殿はまだ歸らずかと。地云に女房涙含。地アイ御存知の内の所體。宿に居ては詰らぬ迚。今朝出て今に歸りませぬ。日比から小氣な人。無分別でも出やせぬかと。案じ過しがせらるゝと暮露〳〵涙に囃ひ泣。地アヽそふ思はしやるも道理〳〵。世に在る時は。鹽冶判官樣の御用人片岡傳吾樣の御家來の元助殿。不自由な目には合ぬ人一昨年の騷動に。お家が潰れてお主の御難義。身に引受ての世話苦勞。奇特な人じやと思ふに付。私も若い時から傳吾樣に御奉公。年寄て武家の奉公は氣苦勞にござります。町方へ引込で靑菜小菜でも賣たいと。お暇を願ふたれば。久々律義に勤た御褒美迚。お金を戴き其上に。お世話を以て七年前から此大屋役。家内が何ふなれ彼ふなれ暮して行も皆お蔭。寢た間も忘れぬお主の大恩。所に降て涌たお家の災難。御浪人の憂世渡り。鎌倉上方と旣廻り種々とお物入を。爰な亭主が工面才覺皆手前の身に引受詰り〳〵し此節季。俱々に世話せにやならぬ。ソシテ出脱ても濟まいがシテマア何處へ行てゞ有。アイ大方旦那の御座らしやる奥町の貸座敷へ行れて居るでござりましよ。そんなら往て連て來ましよア、近年の陽氣の惡さ。世間一統逼迫かは。借金負ぬ者はない。必ずきな〳〵思はしやるなと。地口には言ど後先をフシ案じながらに出て行。地女房跡を伏拜。昔の好みと私等を。此所へ呼取て種々との心付。店賃の事は云出さずまだ其上に厚い世話。忝ぶござんする。詞ほんにソレハそふと最前から。閙しさに取紛れて樣子も聞ぬ。地此妹御はどふなされたと。一間に向ひ申しお元樣。詞寢て計ござつては。猶更病氣に障ませう。地サア〳〵是へと呼立られ。アイと返事も凋々と思ひある身の面痩て心も濟ず座に着ば。地女房態と勇を付。詞ヲヽ、お心持も能かして。思ふたより

お色も好い。殊に明日は大事の中元。手水遣ふて六ケ敷ば櫛卷にでも取上なされ。私も髪を片付て手傳ふて上ましよと。地諫られてもフシ諫まぬ顔種々と御深切に氣を引立て下さんすれど。どふで私は憧死と。覺悟極て居りまする。今更云ではなけれ共。詞兄様は傳吾様には譜代の御家來。其妹のわたしなれど。お過なされた親旦那様のお世話にて鹽冶様の部屋方へ。初は輕い奉公も。地奥様の御目に留り有難いお傍の勤。どふした縁か傳吾様。詞侍らしう。屹度して。地頼もしいお人やと思ひ付たが癇の種。他目を忍び邂逅に。恥かしながら打明けて。思ひの丈を言度に。不義は屋敷の御法度。詞重て云なと取合ず。兎角する内お家の災難。今御浪人のお身なれば。地當り障りも有まいと。度々送る文玉章。色好返事も有事か。詞前とは違ひ元助が世話に成る流浪の身。時節を待との事故に。うか〳〵暮すもモウ三年。一昨日上た文の御返事。奉公稼の口もなく。主從貧苦に迫る此身。縁がないと諦めて。さつぱりと思ひ切。似合の方へ嫁入せよと。コレ細々との此お返事。見るとわたしは胸の痞。地まだも頼みに是迄は。兎や角思ふた綱も切。思ひ切れとは胴欲な。苛たらしい此御返事。あぢきなき世と一筋に胸を極て居りまする。愁氣世帶に兄様もお前も厚い苦勞の中。榮耀らしいと思召恥も人目も外聞も。惚たが因果と諦めて。了簡して下さんせとワツト計に泣沈む。地おせきは脊をフシ撫下し。詞正直なお心からさふ思召も無理ならねど。木折に行ぬは戀路の習。必すきなきな思はんすな。地マア〳〵奥へと勸られ涙ながらに立て行。地おせきは跡を打詠め。剽んな事云出して病氣の障にならねば能いがと。呟ながら取片付。フシ座敷の埃は。拂共拂はぬ懸に。呵責の鬼味噌。ちよこ〳〵通ふ足健は味噌屋の又作門口から。齒のない齦切ばり。詞コレかみ様。御亭主はまだ戻らずか。アイ〳〵請取金が間違ふて夫でまだ歸りませぬ。歸り次第此方から屹度持せてコレ〳〵其口上も聞飽た。必ず違へて下さるな。地行廻つて來ませふと。フシ云捨て出て行。地行違ふて仕事師長藏。おせきは見るより。詞ヲヽ長藏様度々御苦勞。イヤお前様の前でござりやすが。慮外ながら其日過の私ち等が身の上。其處の使彼處の飛脚。使倒され踏れちや立ない。立ない〳〵柔和

りと立て貰やんすべい何の事だ咄しの樣なと フシ喚散せば。ヲ、詞皆此方樣のが 尤 拂ふまいと云にこそ此方も懸を取集めて晩迄には屹度差引。いき廻つて來て下さんせ。ヲイそんなら後に來た時に。コレ彼是は云せぬぞと。地一寸遁れた三寸釘。裏を フシ返して出て行。地又も跡から三人連。米屋の四郎九郎薪屋の才八。財布擔て内に入。詞アイおかみ樣お取込でござりませふが。段々の滯り委細は通に記した通り。何分にも此節季はアイ此薪屋もお賴み申します。ハテお拂ひさへ濟ますれば。又九月か惠美須講前迄は。隨分御用に立ませふと地眞綿で出るを フシ笑顔で受。詞アイアイ主もまだ歸りませぬ後にござつて下さりませ。ハイ夫ならお賴申ますと。地打連立て出て行 フシ跡へ入來る小紋の羽織。言ねど見ゆる世利吳服。平野屋の清兵衞がずつと這入て。詞ヤレ〳〵今日は蒸くるぞ。おゑ樣慮外ながら茶でも水でも一つお吳。地アイと答て女房が。汲て出す手を確と執へ。詞ほんにゑらじや奇麗もんじや。コレおゑ樣お前の樣な卜一の代物は。シにも丁にも士の女形にも透許と口印。ほんに付上しに成迚もお前故なら厭やせぬと目を細めて フシ寄添ば。ホ、、、、マア清公樣久しいもんだよ。そしてマア何の事やら大なし譯が知ぬぞへ。知ぬとはヱ、野夫な。爰な内へは折々仲間の者も見へれば。大方覺へて居なさりそふな物。コレ私らが店の相詞。卜一とは上と云事。シは深川丁は丁と云字にて是吉原の替詞。士とは堺町口印とはないと云事。上から次第に言續ればお前の樣な上代物は。深川にも吉原にも堺町の女形にも透許ないとの譬詞。日比からわしが大層惚て居る故。吹ば散樣な爰の内へ不相應な代物。縮緬羽二重紗綾綸子。隨分利口に付ように引物分にして送越たる盜人の晝寢。此方樣を仕占る軍法智略。合點してお吳るなら。此上二拾兩や三拾兩の代物は貸て上るハテ帳合はどうなりと能い加減に成分の事。是程氣を揉心中男。地餘り憎ふもごんすまいと戀情掛れば。詞ヱ、めつそふな。主の有身に地轉業計と。フシ振放せば。詞イヱお家樣。ソリヤお前上總木綿で情がないぞへ。主の有身と云んすりや此方の體が秩父絹。惚た事を打明て。結城紬の上田縞からは是非に首尾して青梅縞と。地夢中に フシ成て抱付女房は持餘し。詞アレ〳〵。此

方の人が歸られた。ソレ〳〵其處へアイ〳〵〳〵と地一人狂言請答に。底氣味惡く胡亂〳〵驚視〳〵。狼狽フシ廻つて逃歸る。地女房吐息嘆と吐。詞エ、氣の揉て居る中へ榮耀らしい他深濃。地大事の日を暮して除たと。云宛火打戛ち戛ち。詞此方の人も大屋樣も戻らぬ内は何をどふ。地聖靈棚へ御明を。點す生掛の老足に。走歩行て漸々と。尋大屋と主の元助。差荷ひたる棺桶に。括付たる二升樽。樒の花に經帷子。嗔さり卸すお家の眞中。女房は怪轉顏。詞エヱ明日は大事の祝日に。忌々しい此棺桶ヲ、女房樣。樣子言ねば合點が行ぬ筈だ。段々と詰らぬ物前氣の毒に思ふから。わしも種々思案しても詮方盡た折に幸隣町の女衒源の六が爰の姉御お元殿を見て。勤奉公に遣ならば三年切て五拾兩は出そふと云故。ハテ差掛つた難義の場。先刻にから元助殿に種々と談合しても。イヤ〳〵武士の飯喰た元助醫士を嚙餓死す共妹は賣ぬとの片意地。其片意地へ聞へたが。借金は如何すると遣つ返しつ理詰の内に風と思ひ付た趣向と云ば。迚も今夜は懸乞が苛迫は知た事。外に言譯の仕方がない故。御亭主を此棺桶へ入て置て死だと云て鬮云ふコリヤ出來た宜らうと。地買て房つた葬禮道具と。聞て女所が途方もない。詞忌々しい其樣な事がコリヤ女房よ極て我がそふ云て有ふとは思ふた。已も猶好はせねど。絶體絶命千番に一番と云矩合の場じや。夫で行ねばコリヤ個樣個樣じや。サア大屋樣。油斷して懸乞輩に樂屋を見られては水の泡。併素機嫌では出來まいと。地洒樽開して茶碗でぐい飲。大屋も俱々フシ引受〳〵。地此勢に遣て吳ふと。地棺桶を佛間の内へ擔込て。禊引拾差當る。金の才覺當惑に。心ならねど女房も。是非なくフシ一間へ入にけり。地表口から懸乞共仕事師長藏味噌屋の又作。麩屋の才八フシ米屋の四郎九郎平野屋淸兵衞。追々に來重り。欲には撓弓張の。挑灯並べて上り口。詞毎來ても取ぬ懸。サア是からはめつきしやつき。留守遣はずと出やしやれ〳〵〳〵と。地口々喚けば一間より。フシ涙片手に。女房おせき。詞ヲラ皆樣折角お出なされたに。此方の亭主は諸方の懸を苦に病んで。持病の癇が取迫。歸ると其儘終頓死。地悲しい事仕ましたと。ワツトは云ど出ぬ涙。袖でフシ隱して紛らせば。地懸乞共は口々に。詞何と言しやる御亭主が死なれ

たとや。南無三寶とは 地云ながら。訝かしそふに見廻せば。女房猶も嘘上げ。詞お馴染のお前方。御同向なされて下さりませと。 地一間の襖押開れば。聖靈棚の正面に。帷子フシ掛し棺桶突据。樒の枝の一本花。芬々匂ふ。五種香に大屋は鼻を片動せ。鈴打鳴し哀氣に。詞夫人間は老少不定にして無常轉變の界なれば。何れか是を遁るべし。譬金持たりと云共。誰か百年の形態を保んや。ア、樂は又苦しみと成。借金或は無茶と成。切金と成年賦と成。誠に此理眼前なりといへ共も人皆是を辨へず。故に佛道に心を入ず。徒に惡業をのみ作つて。無い金を取んと責晄。歎の中の歎なり。然るに彌陀如來。十方衆生の爲に德世往生の願を立。借金手詰なる人を。淨土に引攝し給ふなり。穴賢〳〵と 地引入樣に稱ふれば懸乞共は氣も滅入り。詞ア、扨最愛や氣の毒や南無幽靈出離生死頓生菩提。我々が爲には損しやうぼだい。南無阿彌陀佛。南無妙法蓮華經。南無阿彌陀佛南無妙法蓮華經と。 地宗旨フシ〳〵の手向草。長藏一圓合點せず。詞ヱ、馬鹿〳〵しい何の事だ咄しを繪に描た樣な途方もない手合じやないか。借た物を拂はず死ぬるなら前廣に死んだが宜。明日のない今日に成て長睡と云變亂坊が有るもんかい。此方が懸を踏倒し極樂へ店替して。御大層に閻魔樣を親分に持た迚怖がる樣な手合じやないぞよ。水虎の屁を見る樣な忌々しい何の事だ。ヱ咄しの樣な無終頓智漢じやないか。シタガ五貫や十貫で跡から付ても徒行まい。百貫に編笠鍋釜疊を付立て分散して取にや置ない置ないと。 地欲の角鬼又作始め。皆が其氣にフシ鳴喚を。 地清兵衞押へてア、騷ぐまい〳〵。詞シテお前方の懸は。計金で何程ごんすと 地十算盤を斜に構ゆれば。詞アイ此長藏は日雇代飛脚賃。押括て九貫八百。私は味噌代壹兩貳分貳朱薪代炭代貳拾三貫五百八拾四文。此四郎九郎が米代。三年以來の不足。八兩三分六百貳拾四文ヲツト宜々。皆押括めて金にすれば。兩に五貫二百三拾二文。の錢相場にして。ヱ、拾六兩三分と六拾五文其上へ私は又。爰な亭主が旦那の着料にすると都合。三拾二兩三分拾三匁八分六厘なり。兩口合せて。四拾九兩三分六匁三分六厘也。マア五拾兩と云金高。分散しても何處の端へも屆くまい。私が相談に乘て下んすりや。お前方の懸の分は。此清兵衞が立替ると。

地云は耳より膝摺寄。詞コリヤ面白い談合。シテ其方様が其金を立替る謂は奈何です。サア謂れとて云高が斯じや。爰の女房様に我等首丈。是迄口說ど鷹と雉子。慳々と振れたれど主の有身と辛抱したが。待ば甘露の日和有。亭主が死んだを物怪の幸。是から我等が妾宅にして。園妾と出掛ふど。地聞て皆々コリヤ尤。詞互に妻なし夫なし鬮の通り開た口へ。地勿論直に祝言して。懸を拂ふて貰ひたい。善は急じやサア〳〵と。味噌屋の親父が懷中肩衣。着せて遣たるフシ當座の花聟浮ぬ女房を。無理遣に帽子代りの。置手拭。傍に有合ふ酒樽茶碗。仲人役は米屋の四郎九郎呑だ茶碗を女房へ。さすが心もフシ濟遣ず。地否かる物を後前から寄つて集つて手を持添。詞サア其盃聟君へと。地皆一同に聲張上。謠御子孫も繁昌御壽命も長くいきの松千代掛て。御獻の神酒を卒や進ん。地是て祝儀は納つた。仲人は宵の程。草臥直しに一盃と指つ押へつ有頂天。フシ清兵衛は微笑温面。詞出る船有ば入船。亭主が死でも我等か居れば。今迄の様に負苦は見せぬ。イヤモ日比から寢ても覺ても覺ても寢ても。歌私が思ひは仙臺何岸の立し行馬の數よりもサツサ押々。地どふもならぬとフシ抱付けば。地燒餅交りに惣々が。詞イヨ〳〵抱付たのめ味い事アレ頻摺じやホウヤホウ三國一ぢや聟に成濟した。懸も濟して欲いナ。打て置しやん〳〵。最一つ爲いしやん〳〵。祝ふて三度しやしやんのしやん。地騷散する物音に。桶の内には元助が兼て覺悟も遺は人情。嗔恚の炎心煩胸動。思はず力張ばかた〴〵〳〵。大屋は鈴を打鳴し。紛らす内に清兵衛は堪兼たる鼻息あらく。さなきだに薄きが上の帷子をつゝばり返るに持扱ひ。詞イヤモフ〳〵コリヤ奈何も堪忍ならぬ。地皆様御免と女房を。引立一間へ入んとすれば。大屋心得身を背向。兼て用意の袂から笛と太鼓のヒウドロ〳〵。香爐に炷る焔硝のハツト立たる煙の中。棺桶の蓋押開て。突然と出たる經帷子。額に胡麻鹽撒髪。苧殼の杖を突くりと元助が。フシ幽靈姿。地見るより皆々ワア、悲しく詞くはばら〴〵南無阿彌陀佛〳〵。地稱へる聲も胴震。フシ活た心地はなかりけり。地元助は歩寄り最えん〳〵たる聲音にて。フシアラ恨めしや腹立や。然れば佛の敎にも電光石火の如しとは。詞兼ては聞ど死手の旅昨日今日とは思はざりしを烏

羽玉の闇より闇に迷ふ身は娑婆の愛着煩惱の。罪障深き身の上に。夫婦がフシ中の。兼言も。金故沈む憂命。詞アラ疎薄の娑婆世界金なら只た五十兩で可愛女房を掠奪られるか。ア、金が欲望ナ。歌金に怨が數々ござる。先初夜に金を責晒には諸方無沙汰といびるなり。後夜に金を急迫には是生滅多に鳴喚き。晨鐘の言譯は。生滅滅已懸乞は。寂滅爲樂と腹を立。嗔恚の業火火の車轉輪。〳〵。くるり〳〵。回轉くる廻る高利の座頭金。假の浮世に日濟貸。貪欲無瓶の懸乞の急迫ど吳ん大紅蓮。叫喚焦熱大焦熱。無間等活黑繩の地獄の。呵責思しひらさん思ひ知れと笞振上丁々々地コリヤ堪らぬと清兵衞始。債乞共は一同に跡をも見ずしてヒウドロ〳〵ワア、フシ逃歸る。地時分は宜と大屋は立出。詞ヤレ〳〵案じるより達が安いと拍子能行ました。イヤモ是と云もお前の御蔭。シタガ一生に覺へぬ苦悶さ。芝居で一寸〳〵見た身振を宛ずつぼうに行かしたが。思ひの外味ふ喰て歸つたて今夜の迫門際は越ました。サイノ斯濟ば濟物の剽度半途で崩れたら。奈何せふぞと苦に成て未だに癖が治らぬと。地言つゝ脫す經帷子汗拭やら着替るやら其間に大屋はフシ立上り。詞わしはまだ店賃も取立ず。地主樣から呼に來たれば。向ひ町へも行ねばならぬ。更ぬ內往て來ませふ今夜は緩りと癒やしやれ。必ず外へ出まいぞや。お內儀然らば。アイ段々とお世話樣其禮には及ばぬ詞事と噂許として出て行。詞コリヤ嬶よ。髮が襟へ這入て氣味が惡い。取上て給らぬかと。地云に女房が直立て。フシ押入開て疊紙。フシ重る辛苦黑髮の。胸の縺れを解櫛や末の案じに元結の捻も。戻りて。氣も細く。詞申し元助殿。いかに貧苦に迫れば迚。可有もない目論事。地天道樣が怖しい。詞ハテ役にも立ぬ諢。僞り云もお主の爲。此上奈何な目に遇ても主人のお名を出さぬ樣。高が死ると兼ての覺悟。地ぐど〳〵と案じずと早ふ束て給ひの。アイと諾へてフシ三櫛半。詞ヤ此髮で思ひ出した。妹めはどふしたぞい。ほんに夫よ何や彼やで取紛れ先から忘れて居りましたと。地云つゝ這入一間の內。其處此處捜して走出。詞コレ〳〵〳〵お元樣が居なさらぬ。ソシテ針箱に此書置と。地聞て惱り。詞ヤ何じや妹が見へぬか。書置とは氣遣ひな。地サア〳〵讀と氣を苛てば。行燈の傍に差寄て。詞此世の名殘

と書残したり。及ぬ戀に心を盡し。傳吾様へ種々と申上候へ共。不束な私故お心に叶はず。思ひ切とのお返事。さま〳〵心を取直し諦め〳〵へ共。いかなる過去の悪縁にや思切れぬ戀路の闇。生て心を苦しめんよりと。覺悟極め〳〵て川へ身を投相果候。地ヤア〳〵〳〵と驚く元助。定めて兄様のお呵。ヤア其跡を聞に及ばぬ。捨置れぬ一大事と。地駈出すをコレ〳〵〳〵。詞何ぼお前が追駈ても何所を目途に。ヤア知れた事。七德橋から二段橋イヤ〳〵〳〵。只つた一人で其所爰と。尋る内にはお命が有まいぞへ。其上お前の顔出して見付られては猶濟ぬ。地大屋様へ早ふ知して長屋の衆を頼ましよ。詞ヲヽ出來した女房早く行け。地心得ましたとフシ出る門口。地隱れ聞たる懸乞共。長藏を先に立清兵衛又作才八四郎九郎。嗚や〳〵とわゝり込己等に旨ふ其ざされて。道迄歸りは歸つたが。いかにしても不思議な事と取て返して立聞した。贋幽靈の化の皮。おこはに掛た大術め。地擲縛れと取卷ば。難義の上に重る難義。何と云べき詞さへ泣女房を押退て。元助は座を堅め。詞皆様のお腹立尤じや道理じや。身の欲にせぬ心の潔白。去なから白地には言れぬ身の上。分に過たる諸方の引込。一寸遁れの今日の方便。顯はれたれば百年目。云譯もせず恨もなし。サア地存分に計はれよと。忠義一圖に身を惜まぬフシ所存の程ぞ健氣なる。地五人の者共口々に。詞ヲヽ能覺悟繃掛て代官所へ引去と。地斑々と立寄所へ。待た〳〵と聲掛て。息を計に大屋太郎兵衛。元助聞てフシ突立ば。詞ヤア一つ穴の狢親父め。逢たかつたに能失た。彼奴も一所に連行と。地立掛る鼻の先。投出す五十兩。包解て斑〳〵〳〵。ヤアコリヤ金じや小判じやと。手々に集て。詞コリヤ早速お拂ひが出ました。然も御念入られ惣々を皆濟。ヲイノ。地體爰の御亭主様がお正直で。サレバサ。お内儀様が物和かで。イヤモ別して大屋様が結構で。ヘヽヽヽヽ。ハヽヽヘヽ。お有難ふおござりおます。サア皆ござれと追從滴々。地誤り入て立歸る金の威光とフシられたり。地夫婦は夢に夢見し心地。合點の行ぬ今の金。サイノ奈何した事で急に才覺。いかにも此大屋が才覺の地品玉の種見せませふと。表へ出て連來るは。詞ヤ妹のお元。ほんに健で居さしやんしたは。地どふした譯と尋に太郎兵衛。詞最前爰を出

て突ばかはと向ひ町へ行ふと二段橋を。通掛つたれば。若い女が橋の上から身を投んとする所。不便な事と引留て。顔見れば爰の妹御。奈何した事と様子を聞ば。叶はぬ戀に身を捨て。心中を立るとは尤な様なれど。死て花實が咲ても有まいと。様々に意見しても。書置を殘して出れば。内へは二度歸へられぬ。死せて吳との口説事。イヤ〳〵〳〵。夫よりは差當つてお主故に兄貴の難義。寧そ此方の身を賣て。借金を濟して遣れば。此方の思ふ傳吾様へ。猶心中に成ではないかと。種々と意見して漸く呑込せ。地兼て頼んだ女衒の方へ其譯咄して金請取。火急な間を合しました。詞此子は直に廓へ遣を暇乞させふと思ひ。女衒に譯を呑込せ一寸連て來ましたと。地聞て驚く元助夫婦。お元は涙の顔を上げ。地兄様の御難義。おせき様のお心遣。大屋様まで様々に。詞心を碎く其中で榮耀らしい行過た。大膽者と嘸や嘸。お憎しみもござんしよが。地跡先忘れ一筋に夫を思ふ一念は。大蛇とも成石とも成。佐用姫様や清姫様に。姿容は及ばず共心は。大率劣らじと思ひ詰たる女の一念。詞矢猛に思へどお主筋。恨の數も打付には。地言はでの山の山梔の朽果る共魂は。生替り死替り添通さんと思詰。詞橋の上から一思ひに飛込所を留められ。死も死なれぬ身の因果大屋様のお世話故。地身の代の金が御用に立は嬉しけれど。聞も悲しき君傾城。多くの人に肌觸れて身を穢しなば此世は扨置末世でも。傳吾様が女房によもや持ては下さるまい。花に鳴鳥渠に住む虫も定まる去は有磯海。深き歎に身を沈む。我は鮑の片思ひ思ふ殿御に添れぬは。神の咎か前世に作つた罪の報いかと。思へば身も世も有れぬとくどき立〳〵。岸波と伏して託泣。フシ痛々。しくも不便なり。地おせきは慰勞抱起し。詞ヲヽ日比から悔々と思ふ心がか屈かぬ迚。突詰た戀煩ひ。夫さへ有に有れもない。思設けぬ勤奉公。悲しうなふて何とせふ。道理おや〳〵尤でござんすわいの。コレ申し元助殿。餘り見る目が苛煩い。地替りに往て濟事なら私を遣て下されと。縋り歎けば元助は。默然として居たりしが脇差取出し拔放すを。皆々遽留むれば。涙を班々々と流し。詞女房や妹をも。傾城に賣根性なら貧乏はせぬはやい。輕ふても武士の家來。我恥は主人の恥。主人の恥は殿様のお家の恥と思へば。我身

て我身が麁略にならず。非道な金は設けまい。地お主に引は取らすまいと獲我慢張通し。身は賤しき陪臣でも忠義は誰にも負けまいと。心で自慢して居たが。詞借金負ふて業曝し箸折かゞみの妹を。勤奉公さす樣に。成下つたも下司の智惠。賦甲斐無い我故に不測な難義を掛ると思へば。現在の妹にも。どふも顔が合されぬ。地放して死せて下されと。義を立通す男泣。妹は目を泣膨し。詞イヱ〳〵。不仕合な我が身の上。地死る道なら私が先へ。イヤイヤ己がイヤ私と。死を爭ふ〻シ兄妹を。地太郎兵衞中へ割て入。詞ヱヽ、役にも立ぬ未練の覺悟。師直故に亡びたお家。陪臣の此方等さへ。己やれ嗤付て成共と思ふて居るに。御主人の傳吾樣。下郎の我々に打明て。仰しやりはなされねど。お主の敵を安閑と。餘所に見てござらふか。本望遂た其上は。存命ぬお身の上と諦めてござる故。お元殿の戀を叶へぬも。跡の歎を掛まい爲の。深い思案と見た目は違はぬ。生存て二人共。身を粉に碎て一方の大事の御用に。立ふと思ふ心はなく。犬死するが武士の家來か。忠義に成か。譬て云ばアレ。彼の佛壇に點した燈籠。油と燈心の持合せで。燈る内は明るい。今の身分で言ふて見れば。傳吾樣は油此方は燈心。主人の油の有ん限り。家來の燈心は。燈されるが持前。所を暗いと云ては搔立。埒が明ぬと云ては搔立。段々と搔立て。燈心がなくなれば。油が有ても眞暗闇。高が浪人の身の上。元手の細い燈心一本。世に有人の蠟燭程には。光らぬ筈と諦めて。確と答て搔立ず。敵をお討なさるゝ迄。此方の體を有明行燈。御主人のお身の明りを。立て上るが忠義と云物。能思案して見やしやれと。地貞身の意見いや大屋。言さぬ理詰町内で。口利親父とフシしられたり。地元助ハツと氣を取直し。詞ハア誤つた太郎兵衞殿。貧苦に逼る身の落目。地武士の奉公した者が有れもない界業と。思ふたは皆な愚痴。大星樣を始として御家中のお歴々。樣々に身を略し難行苦業なされるも。地此方や私が幽靈の狂言仕たり。妹に。勤奉公さすも皆。夫々のお主のお爲。詞火に入り水に投苦しみも。御本望お遂なされる爲の足代。敵の首を見る迄の辛抱と思へば。悲しうも何共ない妹泣な。アイ〳〵。地今のお咄し聞ましては。難面のも矢張お情。おなさけ序のお情に

私が賣れて行先へ尋でござつて下さる樣。傳吾樣のお出の時。おせき樣のお執成。吳々お頼申ます。それが此世の思出と跡は フシ詞もない吃逆。地果しなければ太郎兵衞が。サア〳〵ござれと引立る。そんなら兄樣おせき樣。詞ヲヲ得心して往て吳るか。隨分御無事で地お去らばと。おせきが フシ涙村雨に餘所の。袂を。三重へ絞りけり

第八　道行月夜の浮浪姿

謠實にや浮世の業ながら。殊に拙き海士小舟。渡り兼たる夢の世に。住とや云ん海漚の。汎汲車綫由なき。身は蜑人の袖倶に。思ひを干さぬ心かな。斯計經がたく見ゆる世の中に浦山しくも澄月の出汐を卒や汲ふよ〳〵。地夜汐を運ぶ蜑乙女。思ひ思はれ兄弟の。折に觸たる名なれや迚。松風村雨と召れしより月にも。馴るゝ須磨の蜑音。纏燒衣色替て。フシ綺りの衣の空焚や。袖を結んで肩に掛汐汲爲とは思へ共能夫迚も フシ女車。寄ては返る片男波。芦邊の田鶴こそは立騷げ四方の嵐も。音添て。夜寒 フシ何と過さん。更行月こそは明亮なれ。汲は影なれや。燒鹽煙心せよ。さのみなど蜑人の。フシ憂秋のみを過さん。罪なくて フシ配所の月を。身の上に。隙行駒の足早く。地行平の中納言三年は爰に須磨の浦。汐汲業を遊覽と。御立烏帽子狩衣の。所に目立風俗は。月夜烏の浮浪聲。酒のさの字は酒屋のさの字。呑で搖るゝ由良之助。大磯通ひ道草に譫立たる俄の出立。おふさ〳〵のが汐汲は藝子姿のしどけなく。俱に岡に乘牽頭の松八。人の讖も白張の。袖も露けき仕丁の姿。揚屋の亭主清助も。同じ出立に長柄の傘。さしも故有武士の思案も智惠も長暇。フシ彷徨出るぞ。是非もなき。其大磯の。故事も。譬て云ば今戸橋。堀の船宿聲々に。舟か〳〵と呼立て。客の歸りを待乳山。金龍山とは其昔。里に名高き大盡の。遺ひ捨たる金の精龍と變じて此山に登りし故の フシ名なりとかや。道哲の鉦音に聞。其各高雄の名に愛て。印の紅葉色深く。松の綠の一群に。アレ淺草の。地尊くも。大慈の誓蔭頼む。枯たる木にも花咲ず六つの花瓣白砂の。富士の高嶺も見へ渡り。妻手を遙に詠むれば。

仇し野の露消る時なく。鳥邊山の煙立去てのみ住果る。フシ例を爰に古塚原。然れば男女の交りは。互に白骨を抱くと彼土の東坡か然れ共。其身も迷ふ色の道。土手先稻荷茶屋町の竹興屋を過て見渡せば。最中の月の影清く。置も暮ぬを色々の。花に染なす野路の露。人の心も移氣の噂大盡空過客。繕ふ襟の衣紋坂。大門口の人群集。外に類ひは中の町。茶屋の門並賑はしく。客待君の出立築。物言花の花競。目出度内の行燈に。丁子頭の千山と。云ねどしるき品容。客松島の情知り。見るから冷と戀風の身に染渡る初風や。實に此里の指折の。數は一二三の津と心も敏く胸の内透通りたる玉菊に簇の梅の魁て。勝色見せる花の顔。直度氣條の繕はぬ。其物好を菅原の。神ならぬ身は待宵に。簪拔て疊算。思ふ誠の一筋に。當るは長か半太夫。客の氣衆を計ひて。四十八手の手を碎き。確と靜が仕懷に。碁ならぬ色や若松の。春彷彿姿名山の。器量吉野の山櫻。花も實も有花扇。花車風流の嗜は。若手に續く勢もなし。谷の戸出る鶯の鳴音床しき此春の。千代を壽く雛鶴や。其鶴の尾の風流姿。往來の人も三ツ花の。餝る錦戸七綾に。花紫の雪の肌。見るも嬉野通路に。人待顔の語ひは。和國唐土隱なく。直江し内の突出しは。瀨川瀧川鹽衣と。勝れし君の全盛を松坂越た。地ヱ鑿子牽頭が譜立。人目構はぬ浮拍子。由良大盡の揚屋入。目覺しかりける　三重へ次第なり。

第九

歌京の女郎に長崎衣裝。江戸の張を持せて。大坂の揚屋で遊び度とは僻事よ。江戸の女郎に江戸衣裝。江戸の揚屋に江戸の張ツイツイノ詞イヤ〳〵御亭主押へた〳〵。先刻から此松八が獨かぶり。貴樣は大なし色に出ない。ハテめつそふな。今日は由良大盡樣の月見の約束アレアノ奥庭には雪の山を拵へ。此所には一面に櫻の木を造り花。今日の名月を取合せて雪月花の思ひ付。神武以來ない圖の御趣向。取付揚屋の此尾張屋清助が。大磯中への外聞と氣を揉だ其

上に。貴様とおふさ様に譖られて俄のお供。素面では往まいと内を出るから下地が有。色には出ねど餘程來て居る。アレ〳〵モフ旦那も間眠〳〵なされる酒事は置たが宜。其邊は貴様も野夫では有まい。コリヤ松八亭主めが粹ごかし此由良之助を盛潰して置て。外そふとは横着者。其手は喰ぬ呑せろ〳〵。サア旦那の御上意。呑か呑ぬか返答はド、奈何だやい。コレハ術ない。そんならおさの様鳥渡頼ましよ。お間ならお手許見いんしよ。コリヤ堪ぬ。まだ太夫様も見へない内潰れては濟ませぬ。ほんに太夫様はどふして遲いお房様。サイノ方々の茶屋揚屋に思付の今日の趣向。鳥渡御覽じて下さりませと。中の町で呼れなんして大方松屋か駿河屋にて有んしよ。アレ〳〵人事言ば目代置と。太夫様が見へるは〳〵。地天津風雲の通路吹閉て。乙女の姿留めしかイヤ此里の太夫職。名も薄雲の全盛に。フシ並ぶ方なき。品容。對の禿に新造の。蹴放す裾は龍田山。錦吹布道中に。フシ笑顔翻して内に入。詞ヲ、太夫様先刻にからの旦那の待兼。お出の遲計で此清助强いかぶりの狆狗さ。ヲ、定めし呵なんしたで有んしよ。中の町で呼掛られ思はぬ隙入。お房様おさの様。先刻の俄の評判。强い物で有んすによ。ヲ、恥かし。中の町へ行たならば。萬里や宇八が嬲んしよ。リンショ〳〵りんしよ濱松廣い様で狭い。せまいの四郎兼平はア、コレ不味地口取置て。然らば是から呑掛山。コリヤ〳〵松八。已はモフ一滴も行ぬ〳〵。遲い過代に太夫に呑せろ。ソンナラ斯と。此盃では埒明ない。幸亭主が思付。臺の芒に武藏野の月と見せたる大盃。ちよつきりちよと是を斯持て。太夫様から順廻し。此御趣向は奈てごんしよ。コレ松八様笠の様な大盃妾がには廢なんせ。又小矮女か喧ましい。太夫様に上ふと云と新造衆や禿めらが。毎でも正直に次ない。否應のならぬ様。寧そ氣を替獅子に致そ。コレハ宜ろサア始めましよ。太夫様でも旦那でも否とは言さぬ。サア新造衆も並んだ〳〵。笛太皷小皷三絃胡弓サア宜か〳〵〳〵。ヤア獅子は爰じや爰じや。油斷は致さぬ〳〵。ソリヤ由良様が間違だ。ヲツト〳〵何と見事かサア始めろ獅子は何所じや。獅子は爰じや爰じや。油斷は致さぬ〳〵。地騒ぎ半に下女が立出。詞申し〳〵天河屋義平様と云お方が。勝手迄お出なされ。由良太

盡様にお目に掛りたい。取次で吳いと云てござりんすと。地聞て惚り由良之助。詞何だ天河屋義平が來たすな。コリヤ堪らぬ爰には居られぬ。コリヤ／＼玉よ。其天河屋にナ由良之助は先程歸つたと言聞せ。必ず共爰へ來こすな。已はアノ亭座敷に隱れて居よ。薄雲は爰に居て。若も義平が來たならば。言噤て歸して吳。サア皆來いハア先お入なされませふ。歌世にも因果な者ならわしが身じや。可愛男に。幾瀨の思。ヱ、何じやいな置しやんせ。詞子供や。其天河屋とやら云お方はまだ勝手に居なさるか。一寸見て來や。アイ。地此方の襖押明て立出る野夫大盡。詞ノフ薄雲殿太夫殿と。地云に惚り逃んとするを。引捕へ。詞コレ君外そふとは胴欲な。我等も夫様に首丈惚て。爰な内へ度々通ひ。幾度呼ても振付られ座敷はてれぼう。寢所では情所へ手やらさず。虫がかぶると背向。苛目見ても戀もせず。此月見も言込だれど。由良大盡が先じやと云て已が方を變替。面白くない仕打なれど。内にはどふも居堪まれず。牽頭や襲者を相手にして。隣座敷で呑て居たも。其様の顔が見たい計。斯云首尾は大掘出し。サア／＼叶へて暮の鐘とフシ抱付を押退て。詞ホ、、、、お前の臺詞も久しい物。幾度でも同じお返事。好ねば振が勤の習。へ、夫は餘り胴欲だと地無理に抱付闇雲惚フシ持餘したる折からに。詞サア／＼召ませ／＼。虫買しやんせ／＼。虫の名所好人の尋來栖野三室山袖を片敷手枕に。伏見。深草。野嶋が崎。嵯峨野宮城野。高津の宮。數々多き其中に限りも見へぬ武藏野の。地桔梗苅萱女郎花。葉に置露の玉虫や。野邊の錦の機織虫。招く薄の穂に出て。人松虫の夕暮は。心の駒の轡虫。我のみ勇む。鈴虫の鳴か鳴ぬを。餘所目にはどうか蟀秋津虫。思ひ亂れて鳴蟬よりも。鳴ぬ螢の身をこがね虫。まかぬは里の油虫。ぴん／＼曲反。毛虫には。女郎様方も持餘し。胸の痞や尺蠖蟲と云て振ならば。颯りと思ひ蚕。召ませいフシとぞ饒舌ける。ヤ何だ色事の最中に邪魔をひろぐ而已ならず。緣機の悪い虫盡し憎虫い蛆虫蠅虫めら棒ふり虫を振舞んとシフ撥たと睨ば。詞ホ、、、、先から彼邊で聞ますれば。嫌悪なさる太夫様へ無器用な口說様。戀も成らぬとは餘り笑止に存じますから。女郎様方の靡かんす。大切なる秘事口傳御傳授致そと存まして。夫婦連の

虫賣お氣に入ねば歸るぶん。サア此方の人ござんせ。ヲ、。緣ない衆生は度し難し。然ばお暇申しましよと フシ立んとすれば。アヽコレ〳〵〳〵氣の短い。そふ云事とは露聊か存申さず。無禮云たは我等が誤り。女郎を麗す秘事口傳どは耳より。コレサ先生。賴々。そんなら夫婦が馴初の咄しが直にお前の後學。恥かしながら私も大坂の新町で。扇屋の揚卷迚花を降せし勤の身。ハテノウ〳〵。拙者めも又二歳の時から。女郎は勿論後家娘。妾お物師乳母婢。色一道の譯知自慢。此奴めに首切。上る程に蹴る程に。親父に隱れて浮れ出ずいいきか〳〵。初て出會ふ揚屋の二階。ムム定て二人が相惚にて互珍々違ひのお手枕。しつぽりと寢たか〳〵。イヽヱイナ初對面から粹自慢。仕こなし振が氣に障り。座敷を明て衝と立跡には我等只一人。モフ來るか〳〵と蒲團の上に長欠。そう〳〵捨ても置れねば。ツイ誤つて虎少將と云氣に成たか。ナンノイナ。床入して身を堅め續が痛いと嘘ついて。サア我等を苛く。ハヽ振倒したかハテノフ世には似た事も有ば有る物。夫程惡した故に。よもや二度來なんすまいと思ひの外。惚たが因果毎日毎夜。來なんす程猶此方も意地。振て〳〵振續け。ムヽ定て腹が立たて有ろ。已が身に覺がある。腹が立と云段か。どこもかしこも立ても居ても。居られぬ程に逼登し。忌々しい賣女めと。屛風の外へ踏出せば。客に踏れて女郎が立かと胸ぐらを斯取て。夫からが口舌の初り。我等も引れつ云掛り。五月雨では有まいし。振と云にも程が有。積る恨を覺えよと。地綠の黑髮手に縅卷。打つ。打れつ嚙付つ組づ。亂のれ爭ひに。二階はめき〳〵。壘はばた〳〵。家根は搖々戸はぐはた〳〵。翻るゝ涙は下屋の班々。ソリヤ大夕立大雷。家鳴震動大地震と。家内の大勢立騷。膳棚が倒るれば。酒樽の汲口が。一度に拔てどぶ〳〵〳〵。ソリヤ津波よと云程こそ有れ。さはちに入た濱燒が鰭勃立て泳ぐやら樺燒が滑くり出る。煮拔卵子は羽が生。内中を飛廻れば甕が閉付。盲人が見付。フシ上を下へと。騷しが。地漸鎭靜る夜明前。花車ややり手が挨拶で。詞中直りすりや明の鐘か。イヽヱイナ表向は濟ながら。地體此方も惚ては居れど終一通りの浮氣にて末の遂ぬは面白からず。誠私に逢んす氣なら。二世も三世も替るまいと。心中見た其上でと。

云れて我等も熊野の牛王に。サイナ毎日送る起請の數が。三十三億三萬三千三百十三枚。地起請に押た血計も。壹石六斗二升ッシ八合八勺五才。詞ハテ上根な和郎では有。サア雨降て地塊ると。夫から深ふ成程に。餘り深ふ成過て。我等は親父に勘當請。わたしも廓を駈落して。斯云身に成たれど。夫婦暮すが何より樂み　地お前も誠薄雲様に。心中立るお心なら。是から五年も。十年も。一心不亂に通はんせ。詞ム、其内には年が明て喰逃のチョン〳〵幕。無慙なる哉此大盡。お剽輕に成や仕まいか。サア其様算用をさんすが野夫。譬千年萬年でも。通ふ氣に成んすりや眞實な氣に惚て。彼方から持掛さすが。戀の秘傳の大奥の手。いかにも嘘が云通り。短氣は損氣と申すは爰。ハヽアそふ言ば其所も有わい。然らば此戀二人に賴む。取持て呉る氣は中橋か〳〵。夫は何よりお安い事。智惠を富樓那の辯舌で。お手に入るは今の間。太夫様も底心から。否と云てもござんすまいと。地粋な詞を呑込て。サレバイノ　詞わつちも折る拍手がなさにと　地何所やらッシ味な言回しに。へヽヽヽホヽヽヽ。詞サアモフお口が和いだ先生は又格別。是と云もお蔭〳〵。此祝ひに奥の座敷で一つ給ふ。虫位我等が皆買た植込へ放して遣れ。薄雲様にはマア奥へ。逢んしよの二人の衆。兩人參れ。ハア。歌實は心に。思ひはせいてヱ虚な。惚た〳〵の口先はいかひ。艶では有わいな。人なき折に天河屋の。平は卒度立出て。奥の騷を打守り。暫軻て居たりしが。詞ヱヽ情なや。忠義一圖のお侍と思ひの外。由良之助は腰が抜た。女郎に魂奪はれたと上方迄の評判。定て敵に油斷させん方便になされる事で有ふと。打捨て置内にモウ三年の月日は立ど。未に何の沙汰も無故。堺から遙々と下つて直様是迄來たれば。ヤレ義平か懐敷や久しやとお逢なされて下さる筈を。最早歸つて居ぬ抔と。武士に似合ぬ虚言吐は。彌世上の噂の通り。心の腐つたに違ひはない。いつそ一間へ踏込て存分に意見せふか。イヤ〳〵。荒立ては事の破れ。ハテ何とせふ。歌深き思の淵と成る。申し〳〵義平殿。ヤア貴様は最前仄と見た虫寛殿。終に逢も見もせぬ人が。拙者が名を奈何して御存じ。ハア幼少にては度々御意得たれ共。久々中絶したればお見忘れも御尤。諏訪數右衛門が悴。數八でござる

はいの。ほんにそふ仰つしやれば覺ある幼顔。先年親御數右衞門樣には。御勘定司をお勤なされ。御國の御用承はる此義平。度々のお懸合。格別の御懇意。不慮の事にて御浪人。お行衞を存じませねば。御無沙汰致しました。シテ何方にお出なされます。サレバ〳〵。親數右衞門は。七年以前浪人して大坂の住居。我は若氣の花廓通ひ。最前是へ召連し。女房故に勘當請け。此鎌倉へ來りしが先非を悔何卒して古主へ歸參と存る內。思ひ掛なきお家の斷絕。賴も力も落果。せめて敵討一味連判に加はりたいと願ふ折柄大星殿。此廓へ通ふよし是幸と身を略し。入込は入込ながら。我身の上を顧て無差と出兼て居たりしが。義平殿にお目に掛るは天道の引合せ宜敷お執成下され。地何卒一味連判に御加へ下さる樣。偏に賴存ずると身をへりくだり願ふにぞ。義平は翻亂と涙含。詞ハア一旦若氣の誤りにて。そふ云お身に迄成下つても。古主の敵が討たいと思召。樣々お心をお盡し成れる。花は三芳野人は武士。ハ、、、、驚入た御心底。夫に付ても由良之助樣。お主へ忠義世の譏。忘果たるアレアノ姿。そふしたお人では無つたが。いかなる天魔が見入しぞ。三代相恩の御主人樣。大事のお家の潰れた事も。科なき御身を闇々と御生害成れた事も。思ひ出しもなされぬか。殊に今宵はお主の逮夜。身の愼も有べきを。遊に性根を奪はれ。義平が遙々下つても。逢てさへ下されぬ見さげ果たる白痴。數多の御家中に異見する人一人もないとは。能く〳〵不運な殿樣。地草葉の蔭の御無念が。思像れておいとしいと。肌骨を絞るフシ眞身の涙。詞ム、取放したる遊興も敵を欺謀と思の外本心を取失ひ。敵を討事忘れしか。忘れた段ではござりませぬ。寧そ彼所へ踏込で一か撥かを正して見ませふ。地實に尤とフシ立上る。ヤレ暫くと主の淸助。お二人樣のお腹立御尤ではござりますれど。左樣木折に仰しやつては聞御異見も聞ぬ物。譬ば此手水鉢の水淸ば。アレ月の形が眞丸く。有體に移りますれどコレかふ柄杓で掻廻せば。月の形が見定られぬ。憚りながらお前方の心の水を。篤と鎭さしやつて。由良之助樣の月影の照か曇を御覽じませ。ム、面白い亭主が譬。然らば暫く試て見ん。義平樣は奧の小座敷。お前樣は彼の一間。お內儀樣が待てござれば。サア〳〵彼所へ。然

らば夫迄義平殿後程お目に掛りませふ。歌父よ母よと泣聲聞ば。夫に鸚鵡の。移せし言の葉ヲヱ、何じやいな置しやんせ。フシ月毎に。見る月なれど。此月の今宵の月を名月と唐も。倭も持囃し。分て廓の大紋日。身振聲色淨瑠理情歌。茶番狂言拳踊座敷〳〵の賑ひに。門は往來の人群集フシ實に大磯の月見なり。地成事はフシ面白からず。成兼る。事こそ戀の命ぞと。客を醉せて寢入せて。我身を偸む薄雲が。寢衣姿のしどけなく。廊下通ひのフシ足音を。地兼て小陰に松八が。密と立出薄雲樣か。ヲ、松八樣かと縋り付。一度に咄と溜息は忍ぶフシ戀路の氣扱かひ。地松八は聲を潛。詞今宵の月見幸に由良之助を盛潰したれば。本望遂る時節到來。サア〳〵早く案内と。地急を押留。詞由良樣は能寢てなれど。新造禿が寢入ねば。忍び入にはまだ早い。ほんにマア毎日毎夜。お顏は見れど何時染々と打解て。地咄す隙さへ愁に適首尾して嬉しやと私が思ふ樣にはなく。身勝手計胴欲な。心强やと搔口說。恨の果は素人も。フシ夫者も同じ涙なり。詞ホ、心急儘跡先へ氣の付なんだは赦して給。命に替て一大事。世話して給る其方じや物。何の如才が有ろぞいのと。地じつと手を取引寄て。互に抱月影のフシさすが傍りの氣扱ひ。地隣座敷は踊の拍手そつちでせい。ヤツトサ。トチテン〳〵。三絃に此方は合の手卒度の間の。屛風曲輪の手枕に粹を通して照月も雲にフシ隱るゝ風情なり。地一間を出る野夫大盡。差足抜足屛風の陰。息をフシ詰て窺へば。地内に二人が私語。詞未來も夫婦でござんすぞへ。何の替つて能い物かと。地聞に堪らず野夫大盡。直に飛込屛風の内。松八を引立出れば薄雲が。コレノフ待てと留むるを取て突退擲飛し。詞牽頭の分際で言語同斷不屈奴。イヱ〳〵胡亂な事は有いせん。船宿の女房さんから金の無心の言傳。斷云て下されと松八殿を賴む中。お前が見付て氣の廻り。ヤア言な〳〵。未來も夫婦と只た今交した迄聞て居る。是迄己を酷した意趣返し。地二人共一討と切双廻せば押隔。詞浮川竹の流れの身は。親方に叱られまい。朋輩衆に負まいと。思ふ計を力にて。愁氣勤の辛抱も。年が明て添ふと思ふ。間夫が有のが樂しみで。地客衆はほんの表向。心盡しの數々も賴を掛る蜘蛛の最愛と思ふは唐天竺。三千世界の其中に此松八

殿只一人。どんな事が有迚も客衆に肌は。觸まいと思ひ詰たが女の一念。是迄お前を振たのも皆彼人へ立る義理。嘸お腹が立うけれど其處が勤の苦煩場と。思ひやつて下さんせと。詫るも聽ず。詞エ喧しい。其言譯は未來で仕ろと。地直波と拔て打掛るを。引外して松八が。腕首を確と握り。詞成程忍び逢たは越度なれど。今日は由良大盡の約束。隣の疝氣を頭痛とやら。言れぬお構ひおせゝの樺燒。そふ旨ふは參まいと。地突飛されて。詞ヤ此奴が〳〵〳〵。しやらなしやん饞輪な理屈を揑る。コリヤヤイ迂奴等を殺して某が助からふと思ふ了簡なれば。或程今の理屈も入ど。振れたる意趣散し。己等を切て切殺し。跡で腹切覺悟なれば。死だ跡では譽られても譏られても構ひはない。業腹だから切て仕舞ふ。地觀念せよと又切付るを有合ふ臺にて撥しと請。詞ハア遁るゝ丈はと詞を盡し。申す程猶お腹立御尤千萬。誠拙者は親の敵を狙ふ者。敵を討迄暫くの命。御延成され下さらば生々世々の御厚恩と詫るも聽ず。ハ、、、、、。敵討とさへ云ば陣の小口も遁るゝ習と。其手は喰ぬ出直せ〳〵。ハア御疑ひ御尤。何を隱そふ拙者めは。鹽冶判官が家來斧九太夫が悴定九郎と申者。心惡黨故若年にて勘當請。方々と彷徨内。去々年國許城渡しの折柄。情なき親九太夫由良之助に殺されしと。聞る時の其無念さ。敵を討て未來の父へ勘當の詫せんと思へ共。我は東で人と成。由良之助は國家老。面を知らねば色々と心を碎く折に幸。此廓へ入込樣子。牽頭と身をやつし。附覗ふ其内に。緣がなして此女心。通ふは天の與と。待に待たる今日の月見。僞りならぬ拙者が心底。地御推察有て敵を討せて下されよと願へば默頭傍を見廻し。詞ヲヽそふ聞ば此方も安堵。何を隱そふ身は高師直が家來藥師寺次郎左衞門と云者。由良之助が廓通ひの虛を窺ひ討殺せよとの言付にて。其支度は仕て居れ共。後難を思ふ故是迄は延引せしが。親の敵を其方が討たと言ば言譯立。此次郎左衞門が助太刀して討せて遣る。ハヽ然らば拙者はアノ亭座敷へ。我は一間で騷を始め物音に紛さん。ハヽヽヽ重々の御厚恩蔓雲。地來れと勇立ち。押入に隱しする。用意の業物抱込て。フシ亭座敷へと急ぎ行。地跡に藥師寺一人笑。詞皆來い皆來い氣を替てアノ座敷で一踊初めろと　地云に心得新造禿或は藝子

牽頭。兼て仕組の三絃太皷　音頭千代の初めの一踊それで松坂越た。　地ヱ此方は踊の大騒。彼所は修羅の劔の双音。物音紛らす藥師寺がソリヤ早めて來いヤツトサ。　地本性違ぬ大星が。烈しき双に切立られ。拔双打振兩人が。懸出るを見るよりも。ソリヤ喧嘩よと驚き駭踊は　フシ破れ迯散たり。地跡より追來る由良之助。遁れぬ所と左右方より切付るを引外し。膝に引敷後より。狙ひ濟して藥師寺が。火蓋を切たる種が嶋。目的は嘘さり由良之助。瞻のたばねを打貫れ、ぎやつと　フシ計に倒るれば。　地定九郎は起上り。詞ハ、、、、有難し忝し。今ぞ本望遂たりと。　地首撥しと討落す詞ホ、、、、出來た〳〵片時も早く立退れよ。我も直に歸らんと。　地底氣味惡く藥師寺は。枯麁〳〵と立歸れば。定九郎は首引提。薄雲諸共一散に　フシ背門口指て走行く。　地音に驚き駈出る數八。跡に隨ふ女房お浪。首無き死骸打詠め。詞二つ巴の定紋は紛ふ方なき由良之助。何者の仕業なるぞ。ヱ、仕課たり殘念や　地イデ追掛て一詮議。女房續けと駈出す後の方より高聲に。詞ヤア〳〵諏訪の數八暫く待て。大星由良之助對面せんと。地呼はる聲ハツト驚き振返れば。襖押明け立出る　詞ヤア大星殿は御存命。シテ此死骸は。ホ、其譯拙者がお咄しと。地衣服改め牽頭の松八。薄雲　フシ諸共立出る。詞ヤア此方は片岡傳吾殿。ホ、珍しや數八殿。牽頭持松八と成又。斧定九郎と僞りしも。敵を欺る謀。由良之助殿始一味の者共。種々心を盡せ共。敵の用心嚴しくて中々近寄こと叶はず。いかゞはせんと思案取取。幸是なる薄雲は我家來元助といふ者の妹にて。我故斯る憂勤。不便に思ひ折々の里通ひより思付。大星殿と示合せて此仕體。ホ、邪智深き師直。樣々に犬を入。此由良之助を探る故。謀の裏を缺んと。思立たる此狂言。ム、シテ又由良之助と名乘て殺されし此死骸は。ホ、夫こそは汝が父。諏訪數右衞門正親。親子の對面致されよと。地包し首を差出せば夢見し心地數八夫婦敢なき首に抱付前後涙に昏居たる。詞ホ、樣子知らねば驚きは尤。汝が父數右衞門。勘定司勤る内。下役共の引込に。殿の金銀不足に及び。役目の油斷と御怒。御勘當の身と成しが。お家の騷動聞と等しく。本國へかけ付。俱に籠城討死との願ひ去ながら御勘當の身なれば。一つの功なき其内は。城内へは叶はず

寥々と追返せしが。其後又山科に來り。武運拙き數右衞門。一つの功も立がたければ。腹切て相果ん。責て悴數八を連判に加へ下されよと。覺悟極し一圖の願ひ。幸なる哉數右衞門。面體恰好此由良之助に生寫し。敵を欺る一方便と思ひ立。虛腹切んより。ケ樣〳〵と得心させ。由良之助と名乘せて。都鳴原祇園町。或は伏見の撞木町にて。遊里に浸り放蕩は。皆是誠の由良之助ならず。汝が父の數右衞門にて有しぞや。又鎌倉へ來りても。此大磯へ入込せ。人の目に立放埒も。邪智深き師直。却て用心嚴しき故。由良之助は殺されしと。油斷させん其爲に。相談合の父が最期。不意なき死を遂させしも。お主の爲と諦めて。地了簡せよと計にて。涙呑込曇聲。地子細を聞て數八は。ハア、重々深き親の慈悲。勘當の某を一味連判に加へん迚。御命を捨給ふ。夫に引替數八は。若氣の至りの不行跡。親子主從離々散々。御心を苦しめし不孝の罪科。御赦されて下さりませと。首を兩手に押戴き不覺の涙に昏ければ。地女房は猶咳上〳〵。妾故に主の勘當。親子の中を遠ざけし。憎い奴めと嘸やさぞ。日比のお呵思ひやる。退に退れぬ惡緣で夫婦と成は成ながら。息有る內にお顏も拜まず。けふはたまさか此內へ親子夫婦が寄り合ながら。夫と知ねば詞さへ。交さぬ此世の暇乞。御首に成た眞御へお目に掛つて何とマア。言譯した迚歎いた迚何の役に立物ぞと夫婦は フシ首に獅嚙付。消滅。計に泣沈む。地哀彌增由良之助。薄雲は猶貰ひ泣。傳吾も涙押拭ひ。詞夫婦の歎尤至極。謀とは云ながら。敵の家來藥師寺が鐵炮にて見す〳〵御親父を討せ。古朋輩の首討た其時の心の內。コリヤ奈何樣に有うと思ふぞやい。是と云も亡君の敵を討ん爲計。ハア親數右衞門を始某が御勘當。地何卒御赦免有樣に。大星殿の御憐愍。傳吾殿の御取成。偏に願ひ奉る。ム、尤の願ひなれ共。最前も言通り。殿御在世の御勘當。由良之助が私には赦されずと。地手水鉢に差掛り。篤くと手洗ひ嗽ぎ。一間の內より恭しく。一つの位牌を取出し。詞是こそは。亡君鹽冶公の御位牌。御目見へ仕れと。地呼はる聲に人々はハ、、、、ハツト フシ飛退平伏ば。詞清光院殿前少府朝散太夫水泡遠理大居士へ。申上奉る。諏訪數右衞門正親が忠死に免じ。御勘當御免有。一子數八正種。父が名跡下し置れ。今

日より父が名に改め。諏訪數右衞門と名乘せ。敵討一味連判に加へる者なりと　地詞の　内より片岡傳吾連判狀を
フシ差出せ　ば。　ハ、、、、ハツト　地數右衞門姓名を書記し。我指の血に父の首の血。一つに合して確と血判。未來
の悦び我本望。ハ、、、、有難し　忝しと　フシ悦ぶも又涙なり。　地始終篤くと聞濟し。一間を出る天河屋　詞ヤレ
ヤレ及ばぬ町人の了簡で。案じたり恨云たは大な僻事。驚入たは由良之助樣。ホ、珍しや義平殿。遙々とお出の樣子
存ながら。敵へ聞す其爲には。明さぬも一方便と。お心を痛めし段。眞平御免と　地挨拶に。詞コレハ〳〵痛入たお
詞。拔目なき御方便去ながら入込の此廓斯る密事が敵へ洩ては一大事と。　地見廻す襖の此方より。かけ出る主淸助。
詞其義は些少もお氣遣ひ。有れますな。亭主と成たる拙者めは。足輕寺岡平右衞門めでござります。由良之助樣のお差
圖で。幸揚屋の賣居株。敵の犬を客にして。内通の裏を搔。一杯喰せた此方便。お悦びなされて下さりませと。　地忠義
に凝たる寺岡が。末來にフシ其名を揚屋の亭主。　地義平は猶も感じ入。　詞殘る方なき御手都合。お前方はまだしも。
驚入たは此女中。廓に置は可惜事。殊に御家來筋と有からは猶以てお家の名折れ。傳吾樣。お請出し成れませ。金
は私差上ますと。　地義を見て勇む。フシ義平が深切。　地聞に嬉しき薄雲が。フシ無端に喜ぶ後より。　地突然出たる
忍びの曲者。　詞樣子は聞た此趣。師直樣へ注進と。　地駈出すを諏訪片岡撥しと蹴倒し兩足摑み。二つに颯と引裂て。
敵討の首途の血祭り　詞シイ

第十

地薪樵る鎌倉山の繁榮を。花のお江戸に譬れば谷七郷の八百八町。大川通滑川武藏相摸の兩國へ。フシ渡せる橋の
片邊。　地鹽冶判官高定の舊臣。久松半六時重が。浮世を忍ぶ佗住居。寡暮しに稚兒を育。兼る其上に去比より母親
の。明日をも知らぬ病ふの床。醫者の加減の煎藥に漸入る人參も。三厘五厘七りんを煽ぐも破れし澁團扇。フシ貧

乏神の氏子かや。地半六藥煎じ上。詞コリヤ坊よ。祖母様のお目が覺たらお藥上る見て來いよ。地アイと答て卯之助が。悪戯盛りもおとなしく。フシ明る一間の障子の内。夜着と亘燵を前後。床に着ねど老病の。古木の枝葉霜枯て生氣少き顔色も氣は岩疊に目を開き。詞ヲヽ坊か。先刻から寢入はせぬ。今日は取分寒いと思ひ。炬燵の火を強くした故咽が乾く。ドレ藥と地言を幸半六が。フシ孝行深き鈴形の。茶碗の蓋は兀たれど昔の木地は顯るゝ。親子の中の辭宜作法。フシ恭しく差出せば。地母は手に執押戴き。靜に呑て下に置地半六は嬉しげに。詞ホヽ毎にない事快ふお上り成され獣敷存じます。ヲヽ今日はお醫者様加減のお藥。少し苦いで呑心が能おりやる。是なれば氣遣ない。其方は定めし用事も有ふ。孫は己が預るからは跡案じずと出たが宜。ハイイヤモ少しでもお快御様子を見ますれば。大に安堵致します。少據ない急用がござりまする。鳥渡出て參じませふ。コリヤ坊よ。悪戯をせず共祖母様のお傍に居て。何でも御用聞たが宜い。アイ〳〵其代土産を下されや。ヲヽ土平を買て來て遣と。地先へ舐す飴よりも我子に甘き フシ親心とつかはとして出て行。地卯之助は差寄て。詞祖母様や。頭痛がするなら揉で上ふと。地夜着の後へ立廻り。屈かぬ腕を伸上り。見るを フシ見眞似の指遣ひ。地通せぬ力も氣に通し。祖母は暮露と涙を翻し。詞ヲヽ可愛や。小身なれ共鹽冶様の家來。久松半六が惣領。母のない一人子。地世が世の時で有ならば。お乳よ傅と大切に育てん物。登苦に逼る此姿。祖母が病氣を親爺が。一人して苦勞がるを。四つや。五つの子心にも。氣の毒に思ふかして。詞外の子供と遊びもせず傍に居て小間遣ひ。毎晩爺が揉で呉るを見習ふて。按摩迄取ふと思ふ。地雅心がいぢらしい。可愛の者や不便やと。無端涙に昏けるが。詞ホヽヽヽ未練な事言出して半六が聞たら呵らふ。サア坊も眠からふ。アイそんなら後に揉て上ふと。地云宛轉り假寢の。炬燵へ足を差延す手先に有合ふ古布子。風ばし感なと打着する兼房小紋も年經ては。明石の裏の淺黄より。島隱行染直し。祖母の仕裁の中入は。小豆枕にや〳〵と念比振の空鞘を遣二物の仲間共。フシ紺の大なし盛相天窓。地三人連こて直と這入。詞ホヽ祖母様今日は逢

ませなんだ。少加減は能ござるか。ヲ、折助樣角内樣宅平樣。今朝から奈何してござらなんだ。サレバイノ此方の旦那師直樣は茶の湯好き故。今夜も又お客が有迚屋敷中は大騷。今朝七つからお庭の掃除漸と今仕舞爲屈と草臥た。ヲイノ折助が言通り度々のお客には放とする。夫はそふと此方が屋敷へ糊賣に來たが緣と成て。大部屋一統爰な内を宿よりも心易く思ひ。洗濯物頼んだり。色の中宿して貰つたり。來る度毎に飛だ馳走。重寶な姥樣煩ふてきつい不自由早ふ　地能ふ成しやれやと　フシ己が勝手の深切振。詞ヲ、皆の衆が其樣に。優う云て下さるで力が有。ヲ、實に夫よ。棚な重箱に芋と油揚の煮たのも有。長屋の引越に貰た豆煮も有た。茶でも沸して參りませ。頭痛がするから私や寢ます。申し折助樣。慮外ながら其障子を閉て下さりませヲ、。地合點と無義道に。フシ障子閉れば角内が。撤せ手桶の水入て。茶釜の下を吹付る火吹竹さへ燒拔て。尻の詰らぬ假世帶。焚も隔しき鉢屑。竹の火箸も片々は折て短し流し本。尋て事の缺茶碗手々に呑て。詞ヲ、是で些と溫まつた。晩に成と猶寒い。夫はそふと彼めらが見へる時分と。地門を奚の散付て烈き風を苦にもせず。歌花のお江戸の兩國橋をば。白手拭横町に被つて。一山四文の太强い松川煙草でござる。地鼻歌諷ふ三人連。夜發仲間の立者は鳥なき里の蝙蝠や。フシ日暮を待て出來たる。地夫と見るより折助が。詞ホ、此寒いに皆能出た。出掛の口切隱山の初物。賞翫すべいと　フシ娜垂掛るを。地お紺は振切折助が。胸ぐら取てコレ　詞爰な嘘つきめ。私を女房にするからは外の女に肌觸ぬと。云たは一寸〳〵ら卒度の皮。掃溜おさんと云交し。此紺を突出し物お茶挽にして退た。ヱ、欺されて腹が立と。地恨の涙時しらぬ。顏は富士の根白粉のフシ鹿子斑と成にける。地折助は押强く。詞何だ掃溜おさんと色をしたとは。何を目當何を證據。ヲ、其證據コレ見やと。地懷より文取出し　詞よふぞや這々御文下され詠入ら〳〵。扨は我身事。此間野へ出候節。床にて犬に足を喰れ。四五日勤も引居ら〳〵所。能ぞ〳〵御見舞として。放蕩燒三十甘藷七つ贈下され。誠に厚御心の程。山々嬉しく存じら〳〵。何事も御見の節と申殘しら〳〵目出度ちし。折助樣參るさんより。テモあつかましう書くさつた。サア一言

もござんすまいと　地責られて我を。折助が。詞夫見られてやお堪やない。併已が大事に掛て天德寺の間へ入。隱して置た其文。わりや奈何して持て居る。ハテ不測なと眞面目に成。フシ不審立れば。詞ホヽ可笑。女子見ると弱々と餘り白地じや氣が多い。異見せよ迚角内樣。宅平樣が此文を下さつた。エヽ最好かないアノ顏わいのと虐られ　地折助濶と逆上し。詞ヤイ〳〵汝等は已が事を能讒奏ひろいだな。モフ此上はわいらが身の洗淩云て退ける。コレ小よし。角内めは此間船饅頭のおちよに惚て。裏に行た時床花に四文錢丸で一本。そして已に咄すには。遺名代程有ておちよめは味が能い。小よしも器量は大抵なれど。口が臭いて困ると云た。又宅平めは蘿蔔畑の五十造に喰込。どふでも阿彌陀も錢程光る。おきちが鮫膚に競ぶれば。殿樣のお頭巾と乞食の褌程違たと咄した。口が臭いの鮫膚のと云さがされては立まいと。地焚付られて起出す。顏は眞赤のフシ消炭啓氣。地二人は二人が胸ぐら取ば。此方にお紺が泣聲に。詞エヽ忌々しい。地掃溜おさんに見替られ此紺が立物か。詞夫よりは此小よし口が臭いと能言やつた。イヤ鮫膚とは苛らしいと。地打つ。擲づ喰付つ。涙斑々泣聲に。ほうど困てフシしよげ出す。鯨に鯱海參に藁。フシ奴に夜發は。禁物なり。地折しも表に賣聲高く。詞上燗〳〵上諸白と　地言つゝ來掛る酒屋の八兵衞。夫と見るより荷を卸し。詞ヤ此闘靜已が貰ふた八兵衞が留た〳〵と彼等此等を引分〳〵。ハテコリヤ能中の小舌闘。能加減なら置たが宜。コレ八兵衞樣聞て下んせ。イヤ私からイヤわしと取付をアヽ是々。理屈を聞ば尾に葉が付。其邊だらけが喧嘩だらけ。何も彼も引縛めて八兵衞が貰ふからは今爰で中直り。サア〳〵鳥渡サア早ふと。地目交仕方を呑込三人。笑顏作つて傍に寄り。詞何の彼のと云たのも。お前方が最愛いから。惡ふ思ふて下さんすなと。地三人一所にぐつすりとだき付ばしめ返すを。見て居る酒屋は堪兼。コリヤ堪ぬと荷箱にほうどだき付ば。茶碗德利がぐはつたりどたり。一同に噇と打解て。フシ跡は笑ひにしどけなし。地折助は立寄て。詞八兵衞。先刻から取込てろく〳〵咄しもせなんだが。毎日〳〵來た手前此間は遠々しいナ。然ば候夫にこそ。因緣謂故事來歷。我等も强い貧乏樽。身代味咻こツばい

と成。どふで此世に藏酒と。地くよ〳〵思ひ山川の。胸は悶茶苦茶濁酒。兎や與福寺の富の札。詞僅少四百で一の富。金子百兩　地曖酒。借金殘らず隅田川。不思議に濯ぐ四方の垢。祝ふて諸白末廣や。諸願成就。滿願寺と。ホ　ホ　敬白と　フシ饒舌にぞ。地聞て皆々横手を打。詞富て百兩取たとは。ハテ浦山しい能事した。ナサア思ひの外の堀出し仕事。モフ此商賣止にして。日濟でも貸ふかとの思付。シタガ是迄お前方の世話に成たお禮の爲。此一荷の酒は大部屋中へ進上。今持て參り掛。私も内が氣に掛る爰でお渡し申ます皆樣へ能樣に。ホ、コリヤ飛だ事が出來た。サア折助宅平寧の事彼女郎も連て長屋で呑掛山の寒鴉。ア、忝茄子の奈良漬と。地呑ぬ先からエイ嗟さ。フシ囃めき合て。連立行。地跡打詠め八兵衞が笑を含んで居る所へ。立歸る此家の主。詞ホ、半六殿お歸りか。コレハ〳〵矢間十太郎殿奈何して今比。然ば〳〵兼て申合せし通り。今宵九つの鐘を相圖。敵師直が館へ夜討の手都合。夫に付御存の通此十太郎。敵の案内知ん爲酒賣と身を略し。入込しは幸と。大星殿のお差圖にて。大部屋の中間め等役に立ねど足手纏ひ。脚腰立ず死もせぬ毒酒を拵へ持參して。富の祝ひと欺く中間共へ渡したれば。是も先片付たり。ハア殘る方なき由良之助殿の謀。此半六此頃中も一味の衆へ相詰て。萬事申合す筈なれ共。地折悪き老母の大病。今も知れぬ老病。殊に母のなき幼少の悴。彼是と取紛れ心外の御無沙汰。詞アイヤ最早夜討の手都合萬事云合せ濟だからは。必夫には及ばず。今宵九つの鐘を相圖出向ひさへすりや事は濟。御母公へ篤くりと暇乞してお出有と。地言に半六目を泣瞬。詞イヤノウ十太郎殿。御存の如く御母は。亡君鹽冶公へ御乳を上し因迚。我々迄一方ならぬ御厚恩。夫故母が工夫にて此所に住居するも。敵の屋敷へ入込方便。心を碎き老人の糊賣姥と身を略し。地仕付も馴ぬ賤の業。恥を忍び辛苦を厭はず。夏は照日に身を焦し。冬は烈しき雪氷。見る目妨嫌胼皸。内へ戻れば師直屋敷の中間小者を引込て。追從輕薄樣々に屋敷の樣子裏問んと。地後生菩提も打忘れ三年以來心遣。積り〳〵しアノ病ひ。詞毎日〳〵一味の衆の敵討は奈何すると待に待たる母人の。地飯湯も進かぬ大病に。夜討の日限言聞さば。嬉しさ餘つて俄然と。

取詰はせまいかと一日〳〵云後れ。今日迄隱し課せしが。詞最早迫りし今宵なれば。是非に及ばず言聞せ親子別れの盃せんと。今買て來た酒肴。いかなれば此半六生れ付たる貧窮に。老母の病氣一人の悴。何角に付て一味の豪へ無沙汰の段。宜しう賴む矢間殿と。顏を背向て堰流フシ來る涙。呑込計なり。地十太郎も諸共に。悄々心取直し。詞ハテ扨も半六氣の狹い。お袋や子息の事は奈何か仕方も有そな物。跡案じずと相圖の刻限。必々違へまいぞ。地後刻〳〵と云捨て足を早めて別れ行。地半六は立上り。フシ門の戸引寄行燈に。點す附木も寵に。フシ漸殘る埋火の有か。無かの世渡りに。今日の煙も立兼る。地況て明日よりたらちねの如何成行給ふらんと。我子の事も取交て。一方二方三方は。流石昔に土器や。心計の殷斗昆布。敵に搗栗打鮑。障子のフシ此方に並置。地聲を潛て申母人。詞漸只今歸りましたと。地障子を卒度押明れば。詞ヲヽ半六御主人の敵。師直を討門出の盃。待兼て居たはいのと。地先を取れて。詞ハア母人には能御存じ。頓にも申上る筈なれ共。御大病の障にもと只今迄も延引。イヤノフ養君の敵。憎しと思ふ師直を。討て本望遂させんと。一心は凝塊り。風の吹にも氣を付て。一味の衆の相談。頓より知ても知らぬ顏。其方は又此母が。大病故に俄然と。取詰るとの心遣ひ。去迚は僻事ぞや。地養君の敵討其相談を聞屆。往生すれば直に成佛。千部萬部の經陀羅尼。名僧知識の引導も何かは以て及ぶべき。此方を產だ此母が。心を知ぬは恨しい去ながら。詞常から孝行な其方。一日も此世に逗留がさせたいと。思やるも子の身では。無理とは更々。フシ思はぬぞや。詞サア何か云內時移る。どれ盃。地ハツト差出す三方の。土器取ば半六が。フシ酌も涙の露雫。漸潤す脣の。又改る帳付に。サア半六とフシ差置ば。地三方取て押戴き。詞ハ、、、、有難き母人のお盃。毎は給ずと半盞と。地手酌に次でフシ呑盡ば。詞ヤレ待母が肴せふと。地胸押明れば乳の下を。我と覺悟の刀疵。卷たる絹を滴りて。肌着をフシ傳ふ紅に。地半六は氣も轉倒。コハ何故の御自害と。取付歎けば突退刎退。詞イヤ〳〵騷ぐな狼狽な。まだ〳〵見する物有と。地炬燵の蒲團引捲れば。卯之助をぐる〳〵卷。フシ聲立させぬ猿轡。詞コリヤ半六。凡天地

の間に。お主に上越す大切の物はない。矧て況や鹽冶様は。此母がお乳を上。お育申した因迚。幼少からお傍に育。御膳のお下お小袖の拜領。人も羨む御親。御厚恩請た其方。敵討も人並の働では釣合ぬ。人に勝れた手柄をさせ。地責て御恩の百分一。報ぜん物と年寄の。心盡した甲斐有て。今宵夜討の云合せ。詞智謀勝れし由良之助殿に。一味の人々金鐵と。心を堅めし上からは。討損じは有まいなれど。心掛は其方の身の上。貧苦に迫其上に。折悪い我老病母の無アノ卯之助。苦に成いて何とせふ。敵陣へ踏込では。親を忘れ子を忘。身を忘るゝとは云ながら。空を翺翔。地地を走る獣も。親子の中は切なるに。況て人界フシ殊更に。詞實情な其方。此母や悴が事を思ひ出さば自。心も後れ鋒先鈍り。若も不覺を取時は。鹽冶の家來何某こそ。比興未練の腰脱と。末世に汚名を殘しなば。其方一人の恥ならず。先祖の名折御主人の。御家に疵迄付る道理。地其所を思へば此母や。孫が命は大海の一滴。大山の塊。其方の絆にならぬ様。此子を殺して其跡で。潔ふ自害せんと。聲立させぬ猿轡。幾度か胸先へ。双を當は。フシ當ながら。詞日比祖母様〳〵と。其愛らしさ幼氣さ。最前も其方の留守に。頭痛がするなら揉で遣ふと楓の様な手を出して。捻つて呉たを思ひ出せば。どふも已は得殺さぬ。其方の手に掛殺して給も。お主の敵討でなく。母の敵我子の敵と思ひやらば。日比の力に百倍増。高名手柄仕やらふかと。夫計がフシ樂しみぞや。とは地云物の。いかにお主へ忠義じや迚。跡にも先にも只一人の此孫を。祖母が手づから猿轡。縛り緘て殺させるは。情をしらぬ鬼か蛇か。三途川の姥でも。已程酷うは有まいと。堪々し溜涙叭と。計に伏沈。地半六は有にもあられず。奈何なる過去の業因にや。住甲斐もなき貧苦の實。御老體の憂艱難。お氣の休る隙もなく剰へ此有様。勿體なやと計にて壘にフシ喰付居たりしが。地漸に顔を上。詞仰せ一々承る。忠義に捨る悴が命と。地脇指押取拔放し。突通さんと立寄ば。聲立られぬ猿轡。物言たげに蠶を見るに氣も消魂融。心の双金も亂爛。拔身をかゝりと投捨て岸波と伏して血の涙。母は聲掛。詞ヲヽ殺されぬ筈道理じや〳〵尤じや。家の世繼の一人子を。大猫か何ぞの様に。地嚴重搦の其上に。親と祖母

とが相談で。殺すと云苛酷事は廣い世界に又と有まい。敵と敵の寄合か。此春の疱瘡。並の悪い其中で。輕ふ濟だは幸福と。近所隣へ浦山れ。神佛のお蔭ぞと。悦んだも皆徒勞。是を思へば寧の事。疱瘡て死て呉たなら。今の思ひは有まいと。親子手に手を取合て。涙の限り泣盡すは。フシ目も當られぬ次第なり。地半六心取直し。詞ハア後れたり誤つたり。今が最期觀念と。地既に斯よと見へたる所へ。ヤレ待れよと聲を掛。戸を引放し飛込で。拔身拔取十太郎。續いて飛入稚子の。禁め解は。詞ヤア此方は。天河屋義平殿と。地驚ば十太郎。詞宵に貴殿の物語。老母の事子息の事。聞に忍びず夫より直。義平殿の旅宿へ參り。委細の譯相談して只今連立來りし所。思ひ掛なき御母公の御生害。ヱヽ是非もなき次第やと。地歎けば俱に天河屋。詞十太郎樣のお咄し。お笑止に存ますから。お袋樣も御子息樣も私方へ引取て。お世話致しまする積りで。お供致して參りし所。ヱヽ殘念なお自害。仕たが此お子は私が請取からは。少しもお氣遣下されますなと。地聞て悦ぶ半六より。老母は苦痛も打忘れ。詞孫が命助て下さる。忝い共嬉い共。お禮の申樣はござりませぬ。兎角する内夜が更る。サア出立の用意仕やれ。十太郎樣も身を略し。敵地の樣子は知てござれど。又此姥が骨を折て。認置たる師直が。屋敷の案内は此繪圖と。地渡せば半六押戴き。壁に掛れば分間に。フシ東西南北有の儘。長屋裏門表門書院。高樓間居園。炭部屋厩に至る迄。フシ事細密の筆の跡。地十太郎衝立上り。詞ケ程に心を碎かれし老母を始義平殿。安堵の爲の物語。地兼て夜討の懸退は。一味の人數二手に分。大星殿を先として。堀尾富森原片岡。二十四人は表門。ヲヽ搦手よりは。子息力彌。吉田小野寺諏訪潮田。東西より一時に枚を啣んで。ひた〳〵〳〵と前後の門より。忍込ホヽヽヽ面白し〳〵。詞義平も其所爰聞果る。いろはの文字の合印。地山か谷かの相詞。隊伍を亂さぬ奇正の術。此兩人を始として。四十餘人が手を碎き。逃る敵は射て落し。双向ふ奴原片端。大袈裟立割車切。組て押へて搔首捻首破竹の勢皆殺し。目指敵は。師直一人。コレ。此居間を取圍。八方より驅立れば。袋の鼠籠の鳥。討取んは案の内と。フシ手に取如き物語。地老母首を打振て。詞イヤ〳〵夫は心

元ない。一家中の大勢を。敵に持たる師直。油斷して宜物か。コレ此居間の炬燵から。土中を潛る抜道有。サア其行先を御存かと。地思掛なき一言に三人ハツト顔見合。フシ返す詞もなかりけり。詞ヲ、其抜道を御存なく。大事の敵を討洩さば。末の世迄の笑種。其處を思ふて此姥が。糊實と迄成下り。師直屋敷の中間小者。大工日庸に至る迄。歎し懷て漸く と。地聞出し置たるは。悴にフシ手柄させん爲。地今宵出立の餞別に。言聞さんと兼てより。思設けし密事なれども。詞孫を助けて下さつた。十太郎樣へお禮の爲に。半六が手柄を讓り。地大事をお知せ申しますと。負疵も厭ず蹂寄。詞彼地を潛る抜道は。コレ此廊下の下通り。馬屋の脇へ筋違に。炭部屋の奥の方に。拵へ置し二重壁。地此内に隱るれば天眼通は卒知らず。知事ならぬ隱家と。聞よりハツト十太郎。飛逡巡てフシ三拜九拜。老母の神策妙計は。我身の大慶一味の仕合。斯る敎に大身の鐵。炭部屋の壁越に。ぐすと突留首取て。亡君に手向奉らんは偏に老母の御厚情。ハ、、。、、。有難し忝なしと。天にも上る悦び涙。末世末代隱れなき十太郎が高名の。フシ因緣斯とぞ知られたり。地既に其夜も九つの。耳驚かす鐘の聲。心急立十太郎。詞サア〳〵半六。用意〳〵と。地云宛上張脫捨れば。肌には着込火事裝束。包解て用意の頭巾。忍挑灯夜討の調度。地一間の内より半六が。同じ出立の嗜は。貧苦の外の綾錦。枯野の中の多牡丹。咲しもフシかくやと花々し。老母の悦び。天河屋が仰ぎ立ればノウ矢間殿。詞一味の者の出立を迎もの事に母人へ。ホ、尤と立掛り。地後の戸障子引開ければ。裏は名高き大川に。架渡したる橋桁や。實に長橋の渡に伏は。雲なき龍に雪も晴裘夜の月の影冴てフシ最物凄向ふより。遙に見ゆる徒黨の人數。皆一樣の火事裝束。傍も暉く高挑燈。階子斧玄翁掛屋。或は半弓鎚長刀。得物〳〵を引提。威風は鷹の揚が如く。凛々然たる其勢ひ。目覺しかりける　三重次第なり。地今日ぞ念願成就と。勇む老母の顔付も。此世の名殘半六が暇乞してフシ立出れは。地父樣已も行たいと。跡を追ふ子にも後髮。果しは有じと十太郎か。引離して。詞サア半六。ヲ、合點と　地騙出す。此母にして此子を產。彼王陵が母親にも。遙勝りし老女の節義日本の譽と書殘す。

第十一

地柔能剛を制し弱能强を制するとは。張良に石公が傳へし秘法なり。亡君驪治判官の敵高武藏守師直を。今宵夜討の　フシ相圖の刻限。先一番に立出るは。大星由良之助義金。二番目は原鄕右衞門。三番目は大星力彌。跡に續て片岡傳吾。八瀨忠太夫。堀尾嘉兵衞竹森喜多八。着たる羽織の合印。いろはにほ　フシへとと立並ぶ。地勝田早見遠の森し音に聞へし大鷲文吾。佐藤與茂七掛屋の大槌引提〳〵。詞吉田岡崎ちりぬるを若手は小寺立川甚兵衞。諏訪數右衞門久松半六。地得たる半弓手挾て。出るは萱見藤左衞門　フシ空に輝く。大星瀨平。よたれ。そつねならむうゐの奥村矢島。深川彌二郎やまけふこえて。朝霧の　フシ立並びたる蘆野や早野。詞千葉に村松村橋傳治。潮田赤根は長刀構へ。中にも磯川十文字。木村は用意の繼梯子。千崎彌五郎堀井の彌惣。同彌九郎首途の酒にゑひもせず。後陣は矢間十太郎。遙跡より身を卑下し出るは寺岡平右衞門。假名實名袖印　フシ其數四十六人なり。地鎖袴に黑羽織忠義の胸當打揃ふ。實忠臣のいろは文字。フシ目ざましかりける次第なり。地由良之助聲を掛。詞悴力彌を始として。二十四人の人人は表門より入々。鄕右衞門と某は。裏門より込入て。地相圖の笛を吹ならば時分は宜と乘込よ。取べき首は只一つと。由良之助に下知せられ怒の眼一時に。館を遙に睨付表と裏へ　三重へ別れ行。地用心嚴しき高師直。鎖堅めたる裏門を。押ど挾ど大盤石。開べき樣も見へざれば。大鷲文吾佐藤與茂七。件のかけや引提て打碎かんと立寄を押止めて由良之助。詞音して目覺ば事六ケ敷。此高塀を乘越て。內より開よと詞の下。地慓悍の若者共塀を越んと立寄所に。不思議やな此世を去し勘平が。忠義に凝たる魂魄は同じ出立の白裝束。陰の如くに現れて。人々を麾き門の扉を押よと見へしが。錠前ぴんと貫の木外れ。扉左右へ押開く神通力に力を得。フシ我劣じと込入ば。地由良之助は遊所の計略死せしと油斷の師直方。寢耳に水の家中の面々。スハヤ夜討の入たるぞと惘章き切結ぶ。諸方の太刀音騷が

しく。天地も崩るゝ　三重へ計なり。　地一時計の戰ひに寄手は僅一三人。薄手を負たる計にて敵の手負數しれず　然共、大將師直と思しき者も無き所に。足輕寺岡平右衞門。館の內を飛廻り。　詞部屋〳〵は勿論上は天井下は貧子。井の內迄鎚を入て搜せ共師直が行衞知ず。寢間と思しき所を見れば。夜着蒲團の溫度。此寒夜に冷ざるは逃て間なしと覺たり。　地表の方が氣遣しと駈行を。ヤレ平右衞門待々と。矢間十太郎光興。一つの首を引提て駈來り。　詞久松半六が老母の賜。敎の如く敵師直。土中を潛る拔道より。炭部屋に隱れしを突留て首討たりと。　地聞より人々寄集り四十餘人が聲々に。浮木に遇へる盲龜は是。三千年の優曇花の花を見たりや嬉しやと。踊上り飛上り妻を捨子に別れ。老たる親を失しも。此首一つ見た爲よ。今日は如何なる吉日ぞと。首を擲つ喰付つ一同に叭と嬉し泣フシ理過て哀なり。　地由良之助。勇立。　詞首尾能敵を討上は。片時も早く御菩提所。光明寺へ立越ん。　地ホ、尤と一同に勢ひ込で立所に。何所に忍び居たりけん。藥師寺次郎左衞門大須賀團八。おのれ大星遁さじと。右往左往に打て掛る。力彌透さず請流し〳〵。　地暫時が內は討合しが。機敏を打て討太刀に。　地袈裟に掛られ藥師寺最期。替す一の太刀大須賀團八。フシ其儘息は絕にける。　地ヲ、手柄〳〵と稱美の詞。末世末代傳ふる義臣是も偏に君が代の。久敷例竹の葉の榮を。又も書殘す。

安永四年未七月十五日

忠臣伊呂波實記　終

福內鬼外戯作